ISSN0910-3295

研　究　紀　要　29

目　　次

酒呑場遺跡出土の未発表資料について …… 三田村美彦
保坂　康夫　1

甲府盆地から見たヤマト（2）
－銚子塚古墳出土の壺形埴輪－ …… 小林　健二　11

甲州石大工道具について
－大澤・横内氏使用の近・現代資料と活用－ …… 野代　幸和
長田　隆志　23

2013　山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

序

山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センターは、昭和57年に開館・開所してから本年で30年を迎えました。考古博物館ではこれを記念した『インカ帝国展～マチュピチュ「発見」100年～』を開催して、64,865人という多くの方々にご来場いただきました。また、11月には「30年のあゆみ」パネル展を開催し、山梨県の歴史を語るうえで欠くことのできない重要な発見や研究等、両組織の活動を紹介いたしました。

このような中、日頃の研究の一端を次の３編の論文で紹介する『研究紀要』第29号を刊行する運びとなりました。

三田村美彦・保坂康夫「酒呑場遺跡出土の未発表資料について」では、縄文時代中期の栽培大豆が発見された酒呑場遺跡で、200軒近い住居跡から出土した膨大な資料のうち、報告書作成当時に諸般の事情から掲載が見送られた資料を再評価したもので、学術的に遺跡の価値を深める重要な報告であります。なお、この資料は、平成25年２月27日に国文化審議会から重要文化財指定相当と答申された「酒呑場遺跡出土品」の一部です。

小林健二「甲府盆地から見たヤマト（２）－甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪－」では、筆者が、特別展の準備をとおして感じた課題を、出土遺物の再検討という視点から甲斐銚子塚古墳を見直すと言う壮大な計画の第二弾として、本古墳出土品の代名詞ともいえる壺形埴輪について論じたものです。

野代幸和・長田隆志「甲州石大工道具について―大澤・横内氏使用の近・現代資料と活用事例―」では、甲府城の石垣修復事業に関連した伝統技術研究の一環で行われた石道具の資料調査報告です。今回の報告資料は、一部に具体的な使用年代が不明なものもありますが、古くから続く石工技術を伝える貴重な資料報告です。

考古博物館・埋蔵文化財センターでは、これからも考古学の調査研究はもとより埋蔵文化財の周知や普及活用を推進して、県民の皆様が郷土山梨の歴史に大いに誇りを感じられるよう努力を重ねてまいる所存であります。

本誌が少しでもその趣旨に添って活用いただくとともに、各位からご教示と忌憚ないご批判をいただけますよう、あわせてお願い申し上げます。

２０１３年３月

山梨県立考古博物館長　**神　津　孝　正**

山梨県埋蔵文化財センター所長　**八　巻　與志夫**

酒呑場遺跡出土の未発表資料について

三田村　美　彦・保　坂　康　夫

1．はじめに
2．土器
3．土器についての所見
4．石器

1．はじめに

酒呑場遺跡は北杜市長坂町長坂上条にあり、当センターでは酪農試験場の増・改築に伴い４次にわたる調査が行われ報告書が刊行されている（山梨県教育委員会1997・1998・2004・2005）。その結果、縄文時代前～後期・古墳時代前期の住居跡等が検出され、当該期の集落跡であることが判明した。とりわけ、縄文時代中期には200軒近い住居跡と膨大な量の資料が検出され、八ヶ岳南麓の拠点的集落として当時の社会構造を考える上で欠くことのできない重要な遺跡として評価される。また、検出された資料のうち報告書からもれた資料の報告も少しずつ行われている（保坂2006、野代2008、保坂2012）。ここでは、上記した経過を踏まえ本遺跡の学術的な価値をより深耕するための一助として、当センターで調査した際に出土した縄文時代の未発表資料を紹介したい。

執筆は、１～３までを三田村が、４を保坂が担当した。また、土器、石器の縮尺は図版通番の上に記した。

2．土器（第１～３図）

ここで紹介する資料は、山梨県埋蔵文化財センターが酪農試験場の増・改築に伴い実施した、酒呑場遺跡１～３次調査で出土した未発表の縄文土器である。土器は縄文時代中期の資料が主体となり、山梨県から出土するこの時期の土器は、1999年に刊行された山梨県史資料編２原始・古代２でその編年が系統的に示されている（今福1999）。よって、今回紹介する土器の時期及び型式に関しては上記した編年を参考とした。なお、土器の法量、遺存率、胎土、色調等は表１を参照されたい。

Ｓ00586・通番140

（出土地区）Ｃ区１号住居跡（器形）底部から口縁部へ向けて外反する平縁の深鉢形土器。（文様）口縁部に２条の幅広の沈線が横走し、沈線間には磨消円文が施される。地文にはＲＬ単節縄文が施文される。（時期）Ｃ区１号住居跡からは磨消円文が施される類似した土器が出土し、他にも中期中葉藤内式土器が主体的に出土していることを考慮すると(山梨県教育委員会2004)、本資料も藤内式に比定される。

Ｓ0055・通番141

（出土地区）Ｃ区５号住居跡（器形）円筒状を呈す平縁の深鉢形土器。（文様）無文で、ヘラ状工具による縦位の器面調整痕がみられる。（時期）本資料は無文のためその時期が判然としない。ただ、色調や胎土は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。また、Ｃ区５号住居跡は、中期後葉曽利Ⅳ式に比定されるため（山梨県教育委員会1997）、本資料も当該期の可能性がある。

Ｓ00035・通番142

（出土地区）Ｃ区９号住居跡（器形）底部から口縁部へ外反する平縁の深鉢形土器。口唇部は角頭状に肥厚する。また、底部付近がわずかに張り出し屈折底のようになる。（文様）胴部にＲＬ単節縄文が施文される。（時期）底部が屈折底のようになる点と、本資料が出土した住居跡から中期中葉藤内式３～４段階に比定さるもの（山梨県教育委員会2004）が出土していることを考慮すると、当該期の範疇となろう。

Ｓ00334・通番143

（出土地区）Ｃ区３号住居跡（器形）円筒形を呈する深鉢形土器。（文様）口唇部には２単位となる突起が施されるが、一方は欠損し残存した方は蛇体状となる。胴部にはＲＬ単節縄文が施文される。（時期）口唇部に施された蛇体状突起は中期中葉井戸尻式２段階の特徴となることから、本資料は当該期に比定される。

Ｓ00345　通番144

（出土地区）Ｃ区40号住居跡（器形）口縁部が内湾する平縁の深鉢形土器。（文様）内湾する口縁部は無文となる。頸部には指頭による押捺が施された小波状隆帯が巡る。胴部にＲＬ単節縄文が施文される。（時期）頸部に小波状隆帯が巡り胴部の縄文の条が縦

位となるから、中期中葉井戸尻式に比定されよう。

Ｓ00347　通番145

（出土地区）Ｃ区40号住居跡（器形）円筒状を呈する平縁の深鉢形土器。（文様）口唇部に連続爪形文が巡り、胴部にはＲＬ単節縄文が施文される。（時期）連続爪形文や０段多条となる単節縄文の施文から中期中葉井戸尻式に比定されよう。

Ｓ00355　通番146

（出土地区）Ｃ区41号住居跡（器形）底部から口縁部へ向かって外反する平縁の深鉢形土器。（文様）無文。胴部にヘラ状工具による縦位の調整痕がみられる。（時期）文様や器形などの特徴等から、その時期を特定することは難しい。ただ、色調や胎土は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。また、Ｃ区41号住居跡からは中期中葉藤内式３～４段階の土器が多く出土していることから（山梨県教育委員会2004）、藤内式期の範疇で捉えておきたい。

Ｓ00728　通番147

（出土地区）Ｃ区41号住居跡（器形）コップ形を呈する深鉢形土器。（文様）RL単節縄文を胴部下半まで施文。底部付近は無文となる。（時期）文様や器形などの特徴等から、その時期を特定することは難しい。ただ、色調や胎土は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。また、Ｃ区41号住居跡からは中期中葉藤内式３～４段階の土器が多く出土していることを考慮すると（山梨県教育委員会2004）、藤内式期の範疇で捉えておきたい。

Ｓ00245　通番148

（出土地区）Ｃ区78号住居跡（器形）底部から口縁部へ向かって外反する平縁の深鉢形土器。（文様）口縁部は無文帯が巡り、以下RL単節縄文が施文される。（時期）文様や器形などの特徴等から、その時期を特定することは難しい。ただ、色調や胎土は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。また、Ｃ区78号住居跡からは中期中葉藤内式２～３段階の土器が出土していることを考慮すると（山梨県教育委員会2004）、藤内式期の範疇で捉えておきたい。

Ｓ00297　通番149

（出土地区）Ｃ区92号住居跡（器形）底部付近が緩く屈曲し、口縁部へ向かって外反する深鉢形土器。（文様）口唇部が突起状となり、胴部下半まで垂下する逆U字状の隆帯が２単位施される。地文にはLR単節縄文が施文されるが、隆帯間や底部付近は無文となる。（時期）底部付近が緩く屈曲する器形から、中期中葉藤内式４段階～井戸尻式の範疇で捉えておきたい。Ｃ区92号住居跡からは中期中葉藤内式～井戸尻式期土器が多く出土していることも時期決定の参考となろう（山梨県教育委員会2004）。

Ｓ00299　通番150

（出土地区）Ｃ区92号住居跡（器形）底部から口縁部へ向かって外反する平縁の深鉢形土器。（文様）器面全面に原体Lの撚糸文が施文される。（時期）中期中葉の土器で撚糸文の施文は井戸尻式にみられる特徴となることから、井戸尻式に比定される。

Ｓ00324　通番151

（出土地区）Ｃ区142号土坑（器形）底部から口縁部へ向かって外反する平縁の深鉢形土器。（文様）器面全面に原体Lの撚糸文が施文され通番150と類似する。（時期）中期中葉の土器で撚糸文の施文は井戸尻式にみられる特徴となることから井戸尻式に比定される。

Ｓ00083　通番152

（出土地区）Ｃ区Ｈ′34グリッド（器形）底部から口縁部へ向かって外反する平縁の深鉢形土器。口縁部は内側に内折する。（文様）口縁部と底部付近は無文となる。胴部にはＲＬ単節縄文が施文される。（時期）口縁部が内側に内折する器形の特徴から、中期中葉井戸尻式に比定されよう。

Ｓ00939　通番153

（出土地区）Ｉ区16号住居跡（器形）底部から口縁部へ向かって外反する深鉢形土器。口唇部は、一部欠損しているが「の」の字状と楕円の突起が対称の部位に施され、４単位の波状口縁となろう。（文様）胴部には斜位の擦痕と輪積痕がみられる。（時期）前述した文様の特徴や、Ｉ区16号住居跡からは狢沢式でも新しい段階の土器が多く出土していることから中期中葉狢沢式に比定されよう。

Ｓ00776　通番154

（出土地区）Ｉ区20号住居跡（器形）口唇部直下に括れを有し、筒形を呈する平縁の深鉢型土器。（文様）ＬＲ単節縄文を施すが、底部付近は無文となる。（時期）器形や文様からその時期を判断するのは難しい。ただ、色調や胎土は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。また、Ｉ区20号住居跡からは中期中葉藤内式２段階を中心とした土器が多く出土していることから（山梨県教育委員会2004）、藤内式期の範疇で捉えておきたい。

Ｓ00832　通番155

（出土地区）Ｉ区32号住居跡（器形）底部から口縁部に向かって外反する平縁の深鉢型土器。（文様）口縁部に４単位の「の」の字状突起が施されている。口縁部はペン先状工具の連続刺突による三角押文が縦、横位に施文される。胴部上半は隆帯による楕円区画文が４段にわたり施され、胴下半は懸垂文となる。隆帯には三角押文が沿うように施文されている。（時期）横帯区画の楕円文や懸垂文にペン先状工具による

三角押文がみられることから、新道式１段階に比定される。

Ｓ00801　通番156

（出土地区）Ｉ区33号住居跡（器形）底部から口縁部に向かって外反する平縁の深鉢型土器。（文様）口縁部から胴部下半まで輪積痕と指頭痕がみられる。（時期）輪積痕と指頭痕を施す土器は中期中葉でも藤内式までみられる。Ｉ区33号住居跡からは、中期中葉藤内式３～４段階の土器が多く出土していることを考慮すると（山梨県教育委員会2004）、藤内式期の範疇で捉えられよう。

Ｓ00948　通番157

（出土地区）Ｉ区33号住居跡（器形）底部から口縁部に向かって外反する平縁の深鉢型土器。（文様）口縁部には無文帯が巡り、胴部にはＲＬ単節縄文が施文される。（時期）本例は器形や文様からその時期を特定するのは難しい。ただ、色調や胎土は酒呑場遺跡から出土した他の中期中葉の土器と類似する。また、Ｉ区33号住居跡からは中期中葉藤内式３～４段階の土器が多く出土していることを考慮すると（山梨県教育委員会2004）、藤内式期の範疇で捉えておきたい。

Ｓ00791　通番158

（出土地区）Ｉ区43号住居跡（器形）胴部が括れ口縁部が内湾する深鉢形土器。（文様）口唇部には２単位の突起を有すが一方は欠損している。地文にＲＬ単節縄文を施文。口縁部には沈線が巡り、隆帯貼付による三叉文をモチーフとした文様が施される。（時期）隆帯貼付による文様表出が半肉彫的であることから、井戸尻式に比定される。Ｉ区43号住居跡からは中期中葉井戸尻式Ｉ～Ⅱ段階の土器が多く出土していることから（山梨県教育委員会2004）井戸尻式期の範疇で捉えられよう。

Ｓ00969　通番159

（出土地区）Ｉ区49号住居跡（器形）胴部下半が緩く括れ、口縁部へ向かって外反する平縁の深鉢形土器。（文様）口唇部から胴部下半にかけて、原体ＲＬの単節縄文を施文。底部付近は無文となる。（時期）器形や文様からその時期を特定するのは難しい。ただ、胎土や色調は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。また、Ｉ区49号住居跡からは藤内式土器が主体的に出土していることから（山梨県教育委員会2004）、藤内式期の範疇で捉えられよう。

Ｓ00784　通番160

（出土地区）Ｉ区Ｉ′33ハ土坑（器形）胴部下半が緩く括れ、口縁部へ向かって外反する平縁の深鉢形土器。（文様）口縁部から胴部下半まで横、斜位の擦痕がみられる。（時期）器形や文様からその時期を特定するのは難しい。ただ、通番153の胴部に施文された擦痕と類似していることを考慮すると、中期中葉狢沢式の可能性がある。

Ｓ00913　通番161

（出土地区）Ｉ区Ｍ′30－１グリッド（器形）円筒状を呈する平縁の深鉢形土器。（文様）口縁部には無文帯が巡り、下端を沈線で区画する。胴部は原体Ｌの撚糸文が施される。（時期）通番151などと同様、撚糸文の施文は中期中葉では井戸尻式にみられることから当該期に比定される。

Ｓ00802　通番162

（出土地区）Ｉ区Ｌ′32－３グリッド（器形）底部から口縁部向け外反する深鉢形土器。（文様）口唇部に眼鏡状突起が２単位施される。口縁部には連続爪形文が施された隆帯で、楕円区画文が表出され、区画内には縦位沈線が施される。胴部は、原体ＲＬの単節縄文が施文される。（時期）眼鏡状突起や楕円区画文が施されていることから、中期中葉藤内式４段階に比定される。

Ｓ00325　通番173

（出土地区）Ｃ区123号土坑（器形）平縁の浅鉢形土器。（文様）縦横位にナデによる器面調整痕がみられる。（時期）器形や文様からその時期を特定するのは難しい。ただ、胎土や色調は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。出土した土坑は中期中葉の井戸尻式期の122号土坑と重複し、新しいことが報告されていることから（山梨県教育委員会1997）中期後葉に比定される可能性がある。

Ｓ00034　通番179

（出土地区）Ｃ区９号住居跡（器形）底部から口縁部にかけて外反する鉢形土器。（文様）口唇部には４単位となる突起が施されていたと思われるがすべて欠損している。口縁部には連続爪形文が施された隆帯が巡り、胴部にはＲＬ単節縄文が施され、底部付近には輪積痕や指頭痕がみられる。（時期）口縁部の連続爪形文が施された隆帯や胴部にみられる単節縄文が０段多条となることは、中期中葉井戸尻式の特徴である。Ｃ区９号住居跡は藤内式４段階から井戸尻式１段階に比定される土器が出土していることから（山梨県教育委員会2004）、本資料も当該期の範疇で捉えられよう。

Ｓ00519　通番182

（出土地区）Ａ区340号土坑（器形）壷形を呈する。胴部上半に２対の橋状把手を有する所謂両耳壷だが、把手は一方が欠損している。（文様）口縁部は無文となり括れを有する頸部には、連続爪形文が３条巡る。胴部には原体ＲＬの単節縄文が施される。（時期）２対の橋状把手を有する壷形土器は、中期後葉曽

利Ⅲ式からみられるようになる。本資料は頸部に連続爪形文が巡る点や地文に縄文を施文することから、曽利Ⅲ式に比定されよう。

Ｓ00400　通番248

（出土地区）Ｃ区20号住居跡（器形）口縁部が内湾する平縁の小形鉢形土器。（文様）無文。（時期）器形や文様からその時期を特定するのは難しい。ただ、胎土や色調は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。Ｃ区20号住居跡からは井戸尻式土器が出土していることから（山梨県教育委員会2004）、本資料も当該期の範疇で捉えておきたい。

Ｓ00754　通番249

（出土地区）Ｃ区41号住居跡（器形）口縁部が内湾する平縁の小形鉢形土器。（文様）無文。胴部に一部輪積痕や指頭圧痕がみられる。（時期）器形や文様からその時期を特定するのは難しい。ただ、胎土や色調は酒呑場遺跡から出土した他の中期の土器と類似する。Ｃ区41号住居跡からは藤内式土器が多く出土していることから（山梨県教育委員会2004）、本資料も藤内式期に比定されよう。

Ｓ01108　通番257

（出土地区）Ｃ区49号住居跡（器形）土器の底部を再利用している台形土器。（文様）残存する部位に文様は認められない。（時期）Ｃ区49号住居跡は井戸尻式期に比定されるため（山梨県教育委員会1997）本資料も当該期の範疇で捉えておきたい。

Ｓ00004　通番258

（出土地区）Ｃ区97号住居跡（器形）円筒形を呈する台形土器。上径の端部は張り出しているが、全面的に欠損している。その断面は摩耗していることから、端部は人為的に欠損されたと考えられる。（文様）無文。胴部には円孔が７ヶ所認められる。（時期）Ｃ区97号住居跡からは、井戸尻式土器が多く出土したことを考慮すると（山梨県教育委員会2004）、本資料も当該期の範疇で捉えておきたい。

３．土器についての所見

以上、30点の土器について概観してきた。いずれも縄文時代中期に帰属するものだが、その主体は狢沢式～井戸尻式にかけての資料となる。この時期山梨で出土する土器は、隆帯や様々な施文具を用いて多様なモチーフが突起や把手、器面に施されるものが多く、深鉢形土器を中心に文様が装飾的である。しかし、今回紹介した資料には縄文のみを施文する通番142・148・152・157・159、撚糸文のみ施文する通番150・151など地文のみ施文する資料や無文となる通番146など、装飾的でない資料が含まれていることに注目したい。これらの土器は、文様などの属性が少ないため時期決定が難しいが、器形、胎土、色調、同じ遺構で供伴する土器などからその時期を推定し、中期中葉藤内式～井戸尻式期の範疇で捉えられることが可能となった。装飾的でない土器の存在は後期中葉以降顕在化するが、中期中葉の土器群にもこのような土器が組成されることを確認しておきたい。

また、台形土器の通番258は、上径端部の破損断面が土器片を用いた土製円盤のように摩耗していることから、人為的な破損、摩耗という行為を想起させる。台形土器には、祭祀に関わる土器をのせる台、盛りつけ道具、土器作りの台などの用途が想定されているが（1999新津）、本資料は台形土器の性格を巡って今後新たに検討すべき事例となろう。

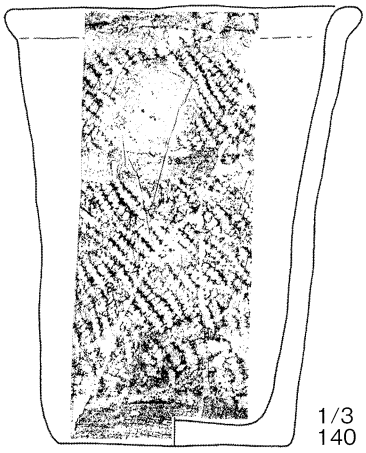
４．石器

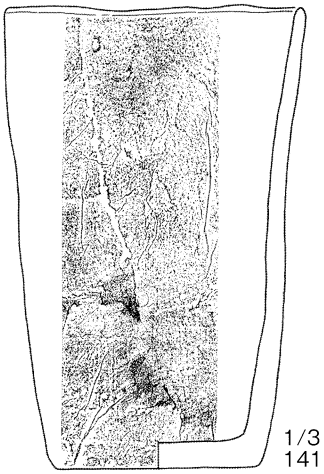
S02043　通番637

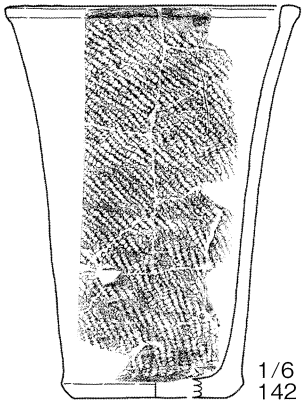
（出土地区）Ⅰ区I’29-４グリッド（形態）石皿。中央部に最大幅16㎝、最大深4.6㎝の細長い凹部をもつ。完形。扁平円磨礫を素材とし、両平面を敲打して平坦に加工。周縁部に自然面残存。（法量）最大長42.2㎝、最大幅37.4㎝、最大厚9.4㎝、重さ19,200g。（石材）安山岩（時期）帰属遺構はなく、グリッド最上層部出土であり、時期不明。

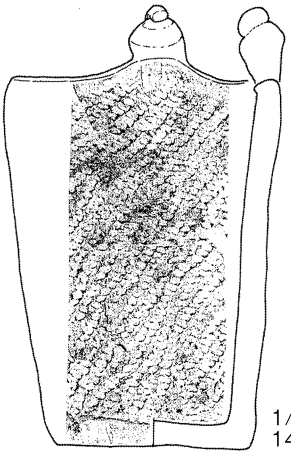
S番号なし　通番647

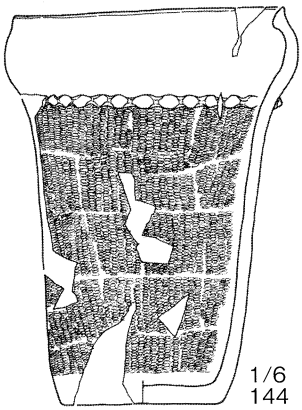
（出土地区）Ｃ区20号土坑（形態）有頭石棒頭部。全体を敲打整形。頭部は、中央部がやや凹み、上方から見ると三角形で、底辺部分が石皿の掃き出し口のように低く凹んで開く。長軸方向に器体半分が黒色化。寝かした状態で焼かれた可能性あり。基部側欠損面は黒色化していないので、焼いた後に破損したと考えられる。（法量）最大長19.0㎝、最大幅12.0㎝、最大厚10.8㎝、重さ3,640g。（石材）デイサイト（時期）新道式期の土坑覆土中より出土（出土状況写真は保坂2012に掲載）。

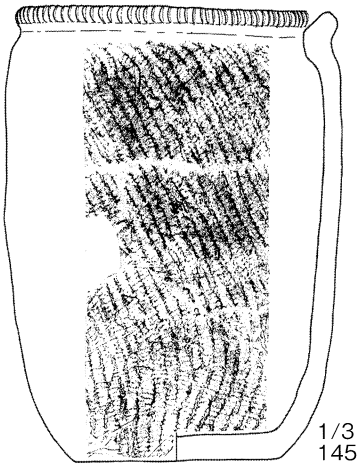

1/3
140

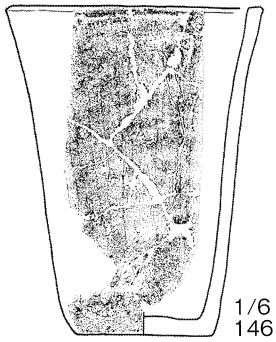

1/3
141

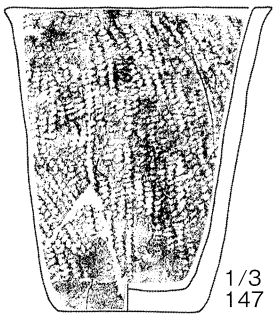

1/6
142

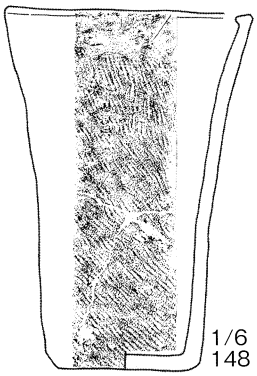

1/3
143

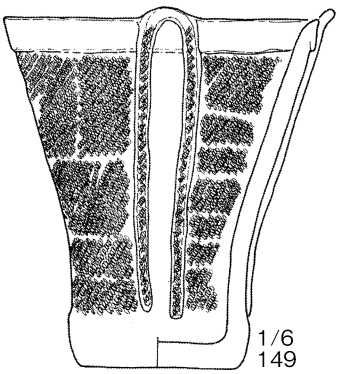

1/6
144

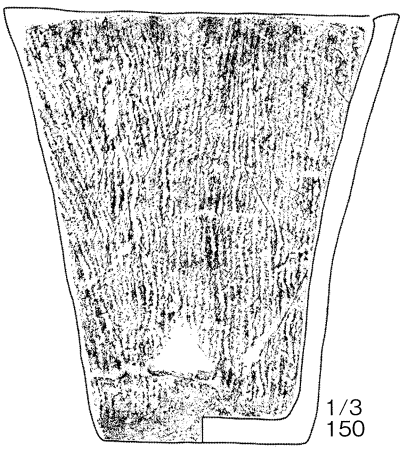

1/3
145

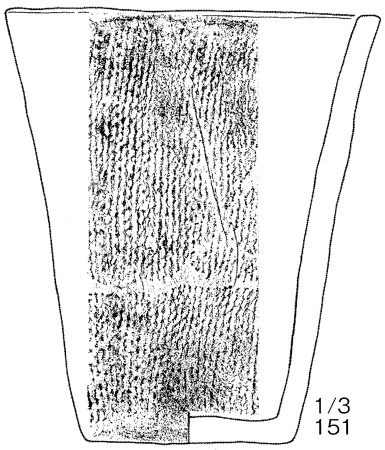

1/6
146

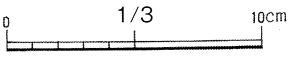

1/3
147

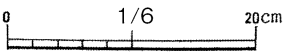

1/6
148


1/6
149

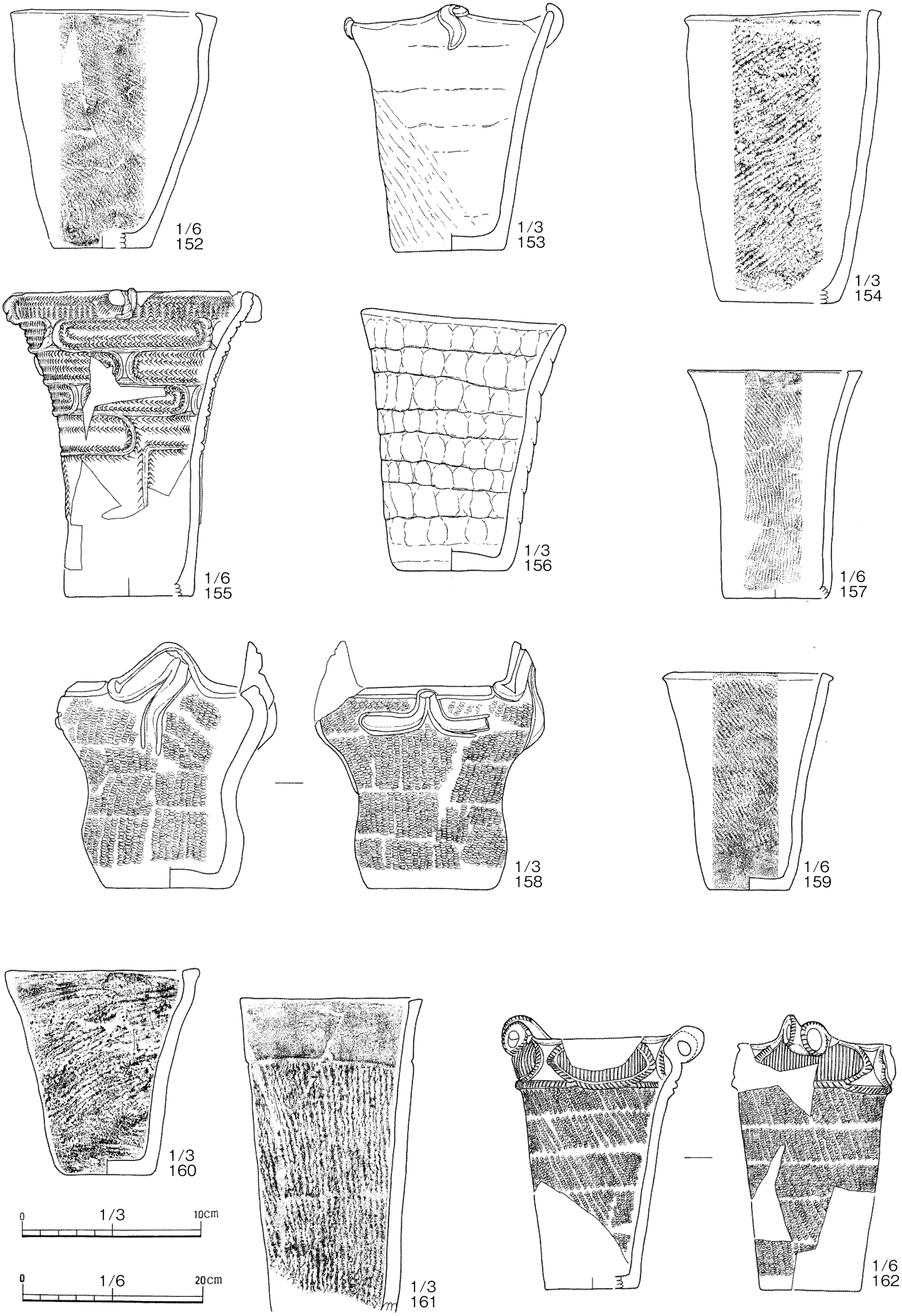

1/3
150


1/3
151

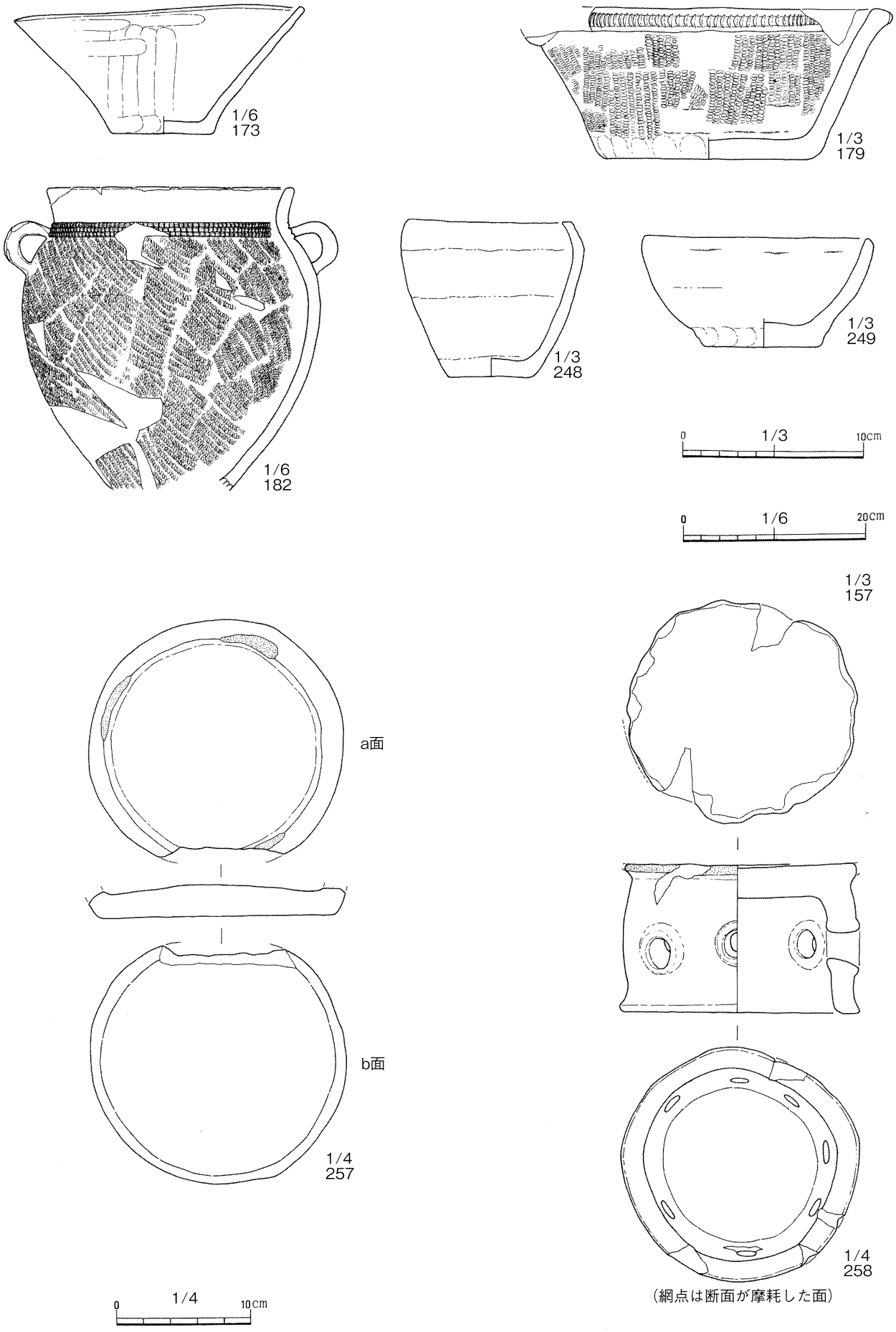

0
1/3
10cm


0
1/6
20cm

第1図　土器

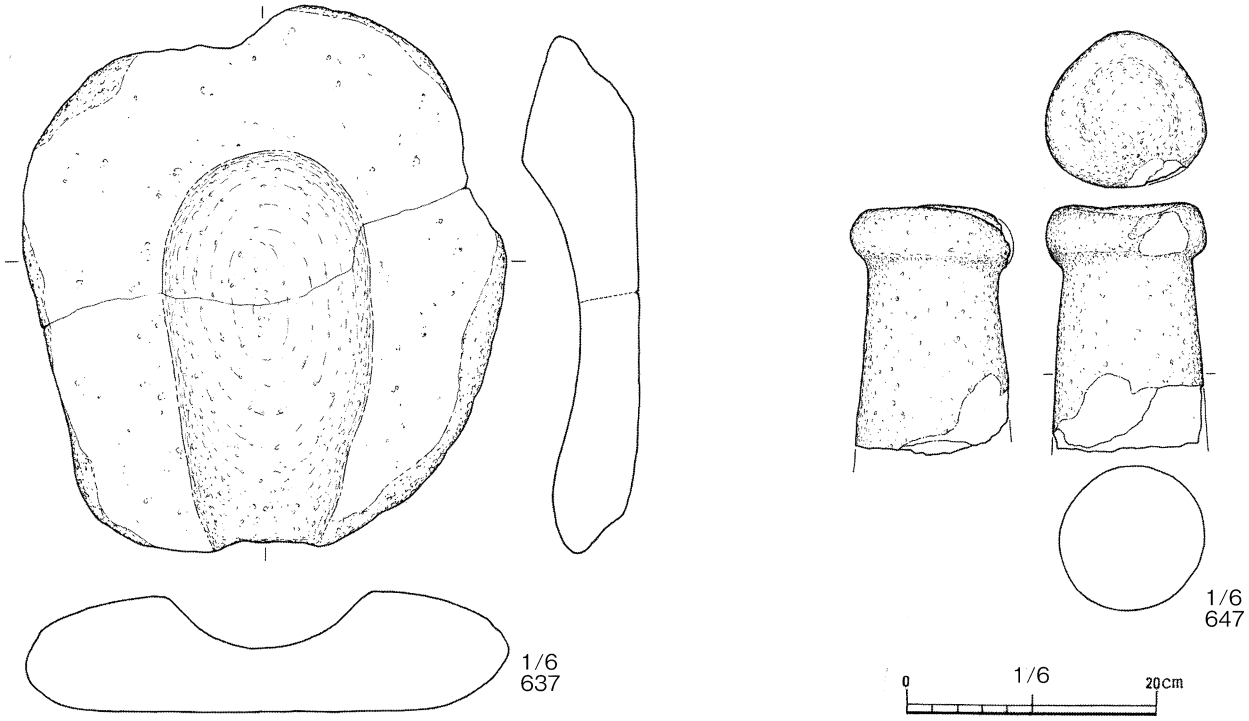

1/6
152
1/3
153
1/3
154
1/6
155
1/3
156
1/6
157
1/3
158
1/6
159
1/3
160
0
1/3
10cm
0
1/6
20cm
1/3
161
1/6
162

第２図　土器



（網点は断面が摩耗した面）

第３図　土器



第４図　石器

第１表　酒呑場遺跡出土土器観察表（（）は推定復元値）

通番(重文)	整理番号	出土地区	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存率(%)	胎土	色調
140	S00586	C区1号住居跡	深鉢形土器	13.3	8.6	17.6	95	石英等の砂粒を混入	褐色
141	S00055	C区５号住居跡	深鉢形土器	11.5	7.7	18.8	80	石英等の砂粒を混入	胴部上半付近黒褐色、底部付近褐色
142	S00035	C区９号住居跡	深鉢形土器	20.9	13	30.4	70	石英等の砂粒を混入	胴部上半付近黒褐色、胴部下半褐色
143	S00334	C区30号住居跡	深鉢形土器	(11.0)	7.9	17.3	70	石英等の砂粒を混入	黒褐色
144	S00345	C区40号住居跡	深鉢形土器	21.4	12.1	31.0	70	石英等の砂粒を混入	胴部上半黒褐色、胴部下半褐色
145	S00347	C区40号住居跡	深鉢形土器	13.4	7.9	17.6	90	石英等の砂粒を混入	褐色
146	S00355	C区41号住居跡	深鉢形土器	(20.0)	10.8	26.0	70	石英等の砂粒を混入	胴部上半褐色黒褐色、胴部下半褐色
147	S00728	C区41号住居跡	深鉢形土器	8.5	5.5	12.3	95	石英等の砂粒を混入	褐色
148	S00245	C区78号住居跡	深鉢形土器	17.9	9.5	28.4	85	石英等の砂粒を混入	胴部上半黒褐色、胴部下半褐色
149	S00297	C区92号住居跡	深鉢形土器	21.0	11.5	28.1	65	石英等の砂粒を混入	淡褐色
150	S00299	C区92号住居跡	深鉢形土器	15.3	8.3	17.5	75	石英等の砂粒を混入	褐色
151	S00324	C区142号土坑	深鉢形土器	12.7	7.6	(17.7)	75	石英等の砂粒を混入	暗褐色
152	S00083	C区H′ 34	深鉢形土器	18.5	10.5	27.3	85	石英等の砂粒を混入	胴部上半黒褐色、胴部下半褐色
153	S00939	Ⅰ区16号住居跡	深鉢形土器	10.2	6.5	14.5	95	石英等の砂粒を混入	橙褐色
154	S00776	Ⅰ区20号住居跡	深鉢形土器	9.7	6.5	16.3	70	石英等の砂粒を混入	赤褐色
155	S00832	Ⅰ区32号住居跡	深鉢形土器	(25.6)	(14.0)	(33.9)	70	石英等の砂粒を混入	胴部上半暗褐色、胴部下半褐色
156	S00801	Ⅰ区33号住居跡	深鉢形土器	11.0	5.7	14.7	90	石英等の砂粒を混入	淡褐色
157	S00948	Ⅰ区33号住居跡	深鉢形土器	17.5	－	25.0	80	石英等の砂粒を混入	黒褐色
158	S00791	Ⅰ区43号住居跡	深鉢形土器	(10.1)	6.2	14.2	85	石英等の砂粒を混入	褐色
159	S00969	Ⅰ区49号住居跡	深鉢形土器	(15.0)	8.3	24.0	70	石英等の砂粒を混入	褐色
160	S00784	Ⅰ区Ⅰ′ 33ハ土坑	深鉢形土器	9.7	4.9	11.4	100	石英等の砂粒を混入	灰褐色
161	S00913	Ⅰ区M′ 30-1	深鉢形土器	10.6	－	(17.9)	80	石英等の砂粒を混入	淡褐色
162	S00802	Ⅰ区L′ 32-3	深鉢形土器	(15.5)	(11.0)	(30.2)	65	石英等の砂粒を混入	褐色
173	S00325	C区123号土坑	浅鉢形土器	29.7	11.1	14.1	70	石英等の砂粒を混入	褐色
179	S00034	C区９号住居跡	鉢形土器	17.4	13.1	8.7	95	石英等の砂粒を混入	褐色
182	S00519	A区340号土坑	壺形土器	(25.0)	－	(33.3)	80	石英等の砂粒を混入	暗褐色
248	S00400	C区20号住居跡	小形土器	8.8	4.3	8.9	95	石英等の砂粒を混入	黒褐色
249	S00754	C区41号住居跡	小形土器	11.5	6.4	6.1	95	石英等の砂粒を混入	褐色
通番(重文)	整理番号	出土地区	器形	上径(cm)	下径(cm)	高さ(cm)	遺存率(%)	胎土	色調
257	S01108	C区49号住居跡	台形土器	17.5	19.0	2.2	90	石英等の砂粒を混入	a面黒褐色、b面淡褐色
258	S00004	C区97号住居跡	台形土器	16.9	17.8	11.0	95	石英等の砂粒を混入	橙褐色

引用・参考文献

山梨県教育委員会1997『酒呑場遺跡（第３次）遺構編－前編』
山梨県教育委員会1997『酒呑場遺跡（第１・２次）遺構編』
山梨県教育委員会1998『酒呑場遺跡（第３次）遺構編－後編』
今福利恵1999「中期中葉（勝坂式土器）・中期後半（曽利式土器）」『山梨県史資料編２　原始・古代２』山梨県
新津　健1999「土器（器台形土器）」『山梨県史資料編２　原始・古代２』山梨県
山梨県教育委員会2004『酒呑場遺跡（第１～３次）遺物－図版編』
山梨県教育委員会2005『酒呑場遺跡（第１～３次）遺物－本文編』
保坂康夫2006「縄文時代の剥片剥離手法－酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から－」『研究紀要』22山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
野代幸和2008「北杜市（旧長坂町）酒呑場遺跡の土坑について－第１～２次調査（Ａ～Ｅ区）を中心に－」『研究紀要』24山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
保坂康夫2012「酒呑場遺跡の石皿と石棒」『研究紀要』28山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

甲府盆地から見たヤマト（2）
－甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪－

小　林　健　二

1．はじめに
2．甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪
3．壺形埴輪の型式分類
4．甲斐における墳墓の変遷と壺形埴輪
5．まとめ
6．おわりに

1．はじめに

筆者は、山梨県立考古博物に所属していた2006年度（平成18）に、第24回特別展「甲府盆地から見たヤマト－甲斐銚子塚古墳出現の背景－」の企画・展示を担当した[1]。この展示会を通じて、多くの成果とともに新たな課題が残されたが、これをきっかけに甲斐銚子塚古墳の出土品について改めて検証すべく、まず腕輪形石製品を取り上げた[2]。しかし、その続編として構想していた他の出土品等については、さしたる調査や検討を行うこともないまま、あっという間に６年の月日が過ぎてしまった。これについては、ひとえに筆者の怠慢にほかならないが、これを少しでも払拭すべく、今回は甲斐銚子塚古墳出土の埴輪のうち、特に壺形埴輪について取り上げる。

甲斐銚子塚古墳は、1928年（昭和３）に発見された竪穴式石槨から豊富な副葬品が出土したことにより、1930年（昭和５）に丸山塚古墳とともに国史跡に指定されたが、埴輪については、それ以前から墳丘一帯に「埴輪円筒」が散在していたことが記載されている[3]。

1949年（昭和24）の奈良県桜井茶臼山古墳の発掘調査を契機として、1950年代以降埴輪研究は大きく前進したが[4]、甲斐地域については、全国的な動向の中で橋本博文氏により、甲斐銚子塚古墳・岡銚子塚古墳をはじめとする円筒埴輪をもとに編年が提示された[5]。また、甲斐の古墳への埴輪導入に関わって、特に甲斐銚子塚古墳については、東日本の古墳や副葬品との比較検討も行われており、その系譜や歴史的意義、解釈は別として[6]、形態的特徴の抽出や編年的位置づけについては、大枠では現在も基本的に変化はない。

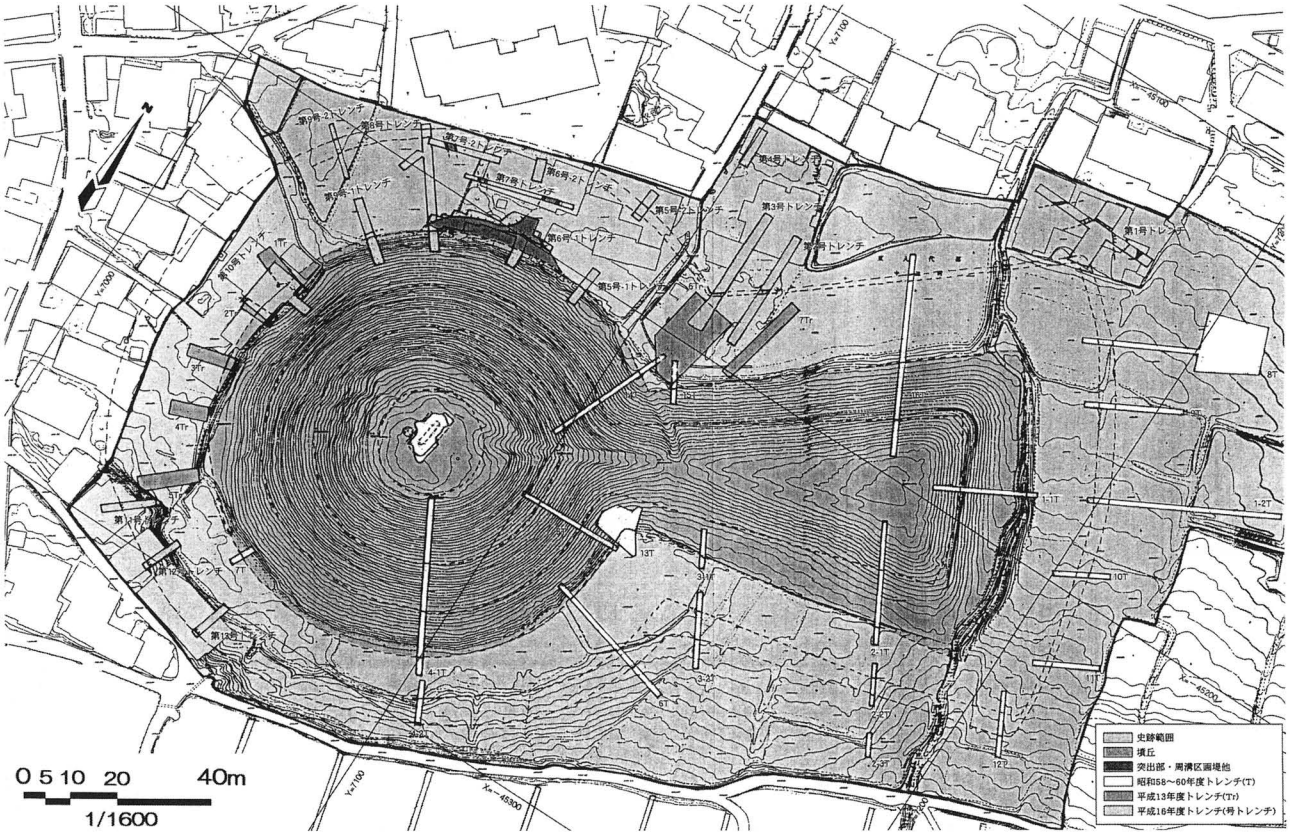
そして、甲斐銚子塚古墳では1983～1985年度（昭和58～60）にかけて行われた第１次整備事業に伴う発掘調査[7]において多くの埴輪片が出土し、これらの中に円筒形・朝顔形・壺形などの各種埴輪の存在が確認された。このうち、後円部南側のくびれ部付近に設定した５号トレンチ（５Ｔ：第１図）から出土した壺形埴輪が復元され、坂本美夫氏により報告書に先駆けていち早く資料紹介され（第５図35）、以後学界で広く知られるようになった[8]。その後、第２次整備事業に伴い、2001年度（平成13）及び2004年度（平成16）に行われた調査[9]においても、後円部に付随する「突出部」などや特徴的な木製品が注目された一方で、埴輪片も一定量が出土している。

このように、甲斐銚子塚古墳の埴輪については、これまでの発掘調査において相当量が出土しているが、そのほとんどが破片資料であり、遺存状況により磨滅したものが多い。特に円筒形埴輪と朝顔形埴輪については、器壁の厚さや外面のハケ調整、凸帯の形状などを指標としておおまかに区別・分類することが出来、実際には円筒形・朝顔形それぞれに複数の型式が存在することは明らかであるが、これまで完形に復元できたものはない。

一方、壺形埴輪については、上記のように唯一全体の形状がわかる資料があり、この古墳及び当該期の代表的な壺形埴輪となっている。しかし、結果的にこの埴輪のみが「ひとり歩き」している感は否めず、その後の第２次整備事業に伴い確認された資料とともに、これらを合わせて再度検討する必要性を強く感じている。最終的には円筒形埴輪・朝顔形埴輪を含めた中で位置づけなければならないが、本稿ではその嚆矢として、甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪について改めて考えてみたい。

2．甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪

甲斐銚子塚古墳では、これまでの発掘調査において合計36箇所のトレンチ（本数は45）が設定されている（第１図）。このうち、最も多くの埴輪片が出土した第１次整備事業に伴う調査の未報告資料を中心に、



第1図　甲斐銚子塚古墳全体図とトレンチ配置

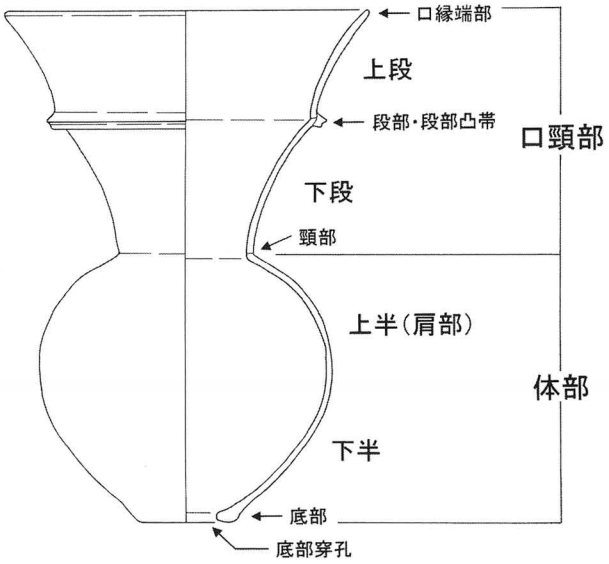
今回実測・再実測を行い、第２次整備事業に伴う調査出土の資料も含め、ここで主な壺形埴輪を概観しておく（第３～５図）。これらは、前方部・後方部の各トレンチから出土しており、坂本氏が報告しているように、円筒形・朝顔形埴輪とともに墳丘を囲繞していたことが改めて推測できる。なお、壺形埴輪の各部位の名称については、先学の研究成果を参考に、ここでは第２図の通りとした[10]。

１は二重口縁となる口頸部上段のやや大型の破片資料である。ほぼまっすぐに外傾し、口縁端部は横ナデにより面を持つ。口縁部径は45.4㎝を測る。外面・内面とも磨滅しており、外面には細かな縦ハケによる調整が確認出来るものの、内面は粘土紐の輪積痕跡を指ナデにより調整したと思われるが、ハケ調整を含め確認できない。色調は橙色で、胎土には白色粒子や小石を多く含む。

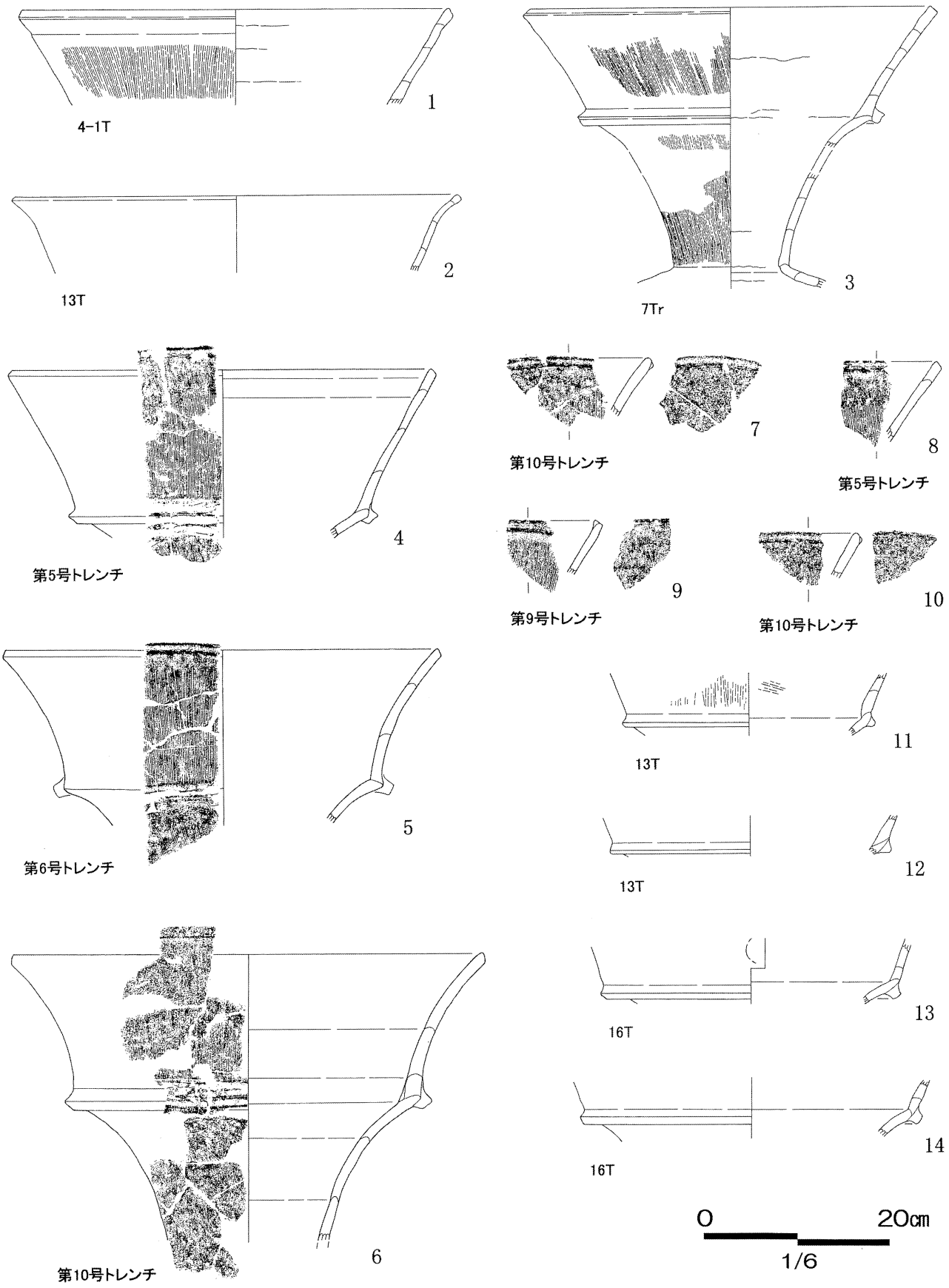
２も口頸部上段の破片資料であるが、こちらは口縁端部が外反している。口縁部径は47㎝で、磨滅が著しく、外面・内面とも調整は確認できず、口縁端部はわずかに丸みを持つ。器壁は１に比べ薄く、色調は橙色で、１同様白色粒子を多く含む。

３は口頸部上段と段部の３分の１ほどが残存するものと、下段から頸部にかけてこちらも３分の１ほどが残っていたものであるが、同一個体と判断し図上で二重口縁に復元した。頸部から下段を経て段部にかけて外反し、上段は１同様直線的に外傾する。上段の高さより下段の高さの方が長い。口縁部径は42.5㎝を測り、口縁端部は面を持つ。段部には下向きに凸帯を貼り付け、横ナデにより仕上げている。頸部を巡る凸帯（頸部凸帯）はない。外面は縦ハケ調整で、内面は指ナデ・ヘラナデにより仕上げている。色調は外面橙色、内面はにぶい橙色で一部に焼けムラが見られる。胎土は１・２と同じである。

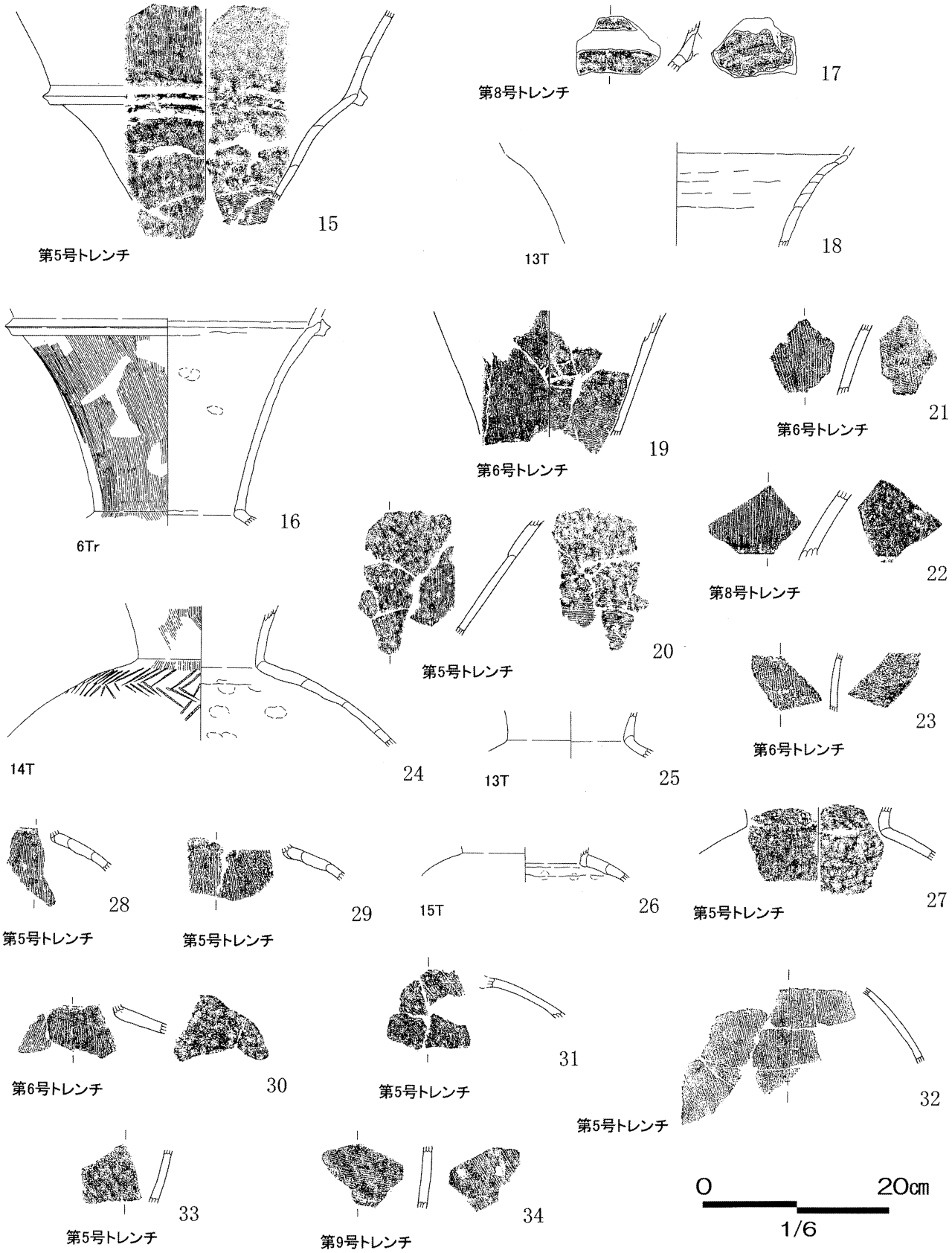
４は上段から段部にかけて４分の１ほどが残存し、



第２図　部位名称図



第３図　甲斐銚子塚古墳出土壺形埴輪（1）
（1・3・13は筆者再実測、2・11・12・14は筆者実測、他は報告書より）



第４図　甲斐銚子塚古墳出土壺形埴輪（2）
（16・18は筆者再実測、24は筆者再トレース・一部加筆、25・26は筆者実測、他は報告書より）

５は同じ部分の大型の破片、６は上段から下段にかけて残る破片である。４の上段は１・３同様ほぼまっすぐ外傾し、口縁部径44.4cm、５・６の上段は外反し、口縁部径は５が46.6cm、６が51cmを測り、口縁端部はいずれも面を持つ。４より５・６の方が段部の屈曲が明瞭である。５は凸帯が欠損しているが、外面・内面の調整方法、凸帯の貼り付け方は３と同じである。色調はいずれも橙色～にぶい橙色を呈し、胎土には白色粒子を多く含み、４には金色雲母も含まれる。

７～10は口縁端部の破片である。調整方法は１～６と同じで、端部は横ナデにより明瞭な面を持つが、７はやや外反気味で他はほぼまっすぐである。外面に縦ハケ、内面はナデ調整が確認出来る。色調は明橙色～橙色で、胎土には赤色粒子を多く含む。

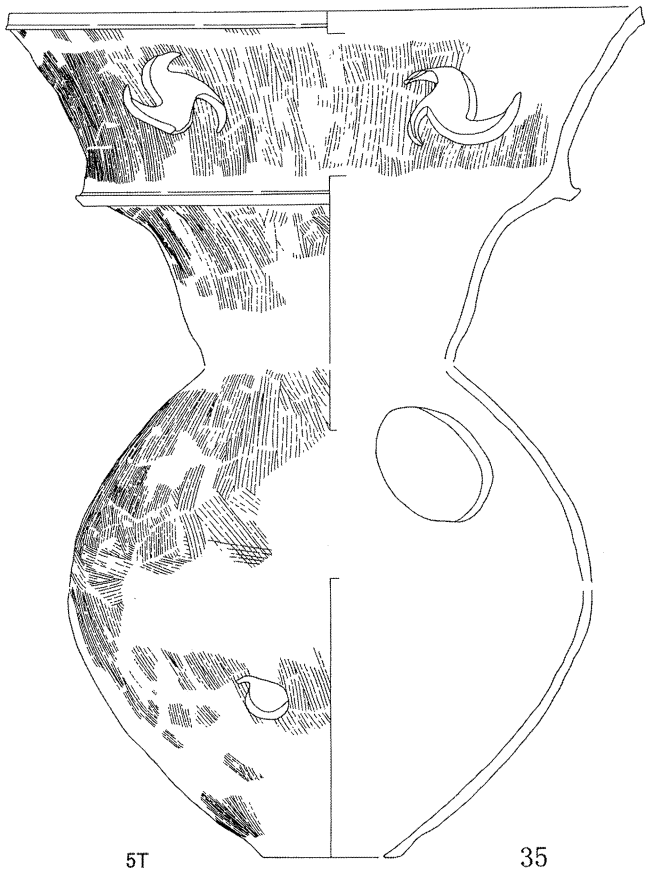
11～15は段部付近の破片であるが、11・12は３～６に比べると一回りほど小型で、凸帯も小さい。11～14はいずれも外面・内面とも磨滅により調整が不鮮明であるが、凸帯の貼り付け方等、基本的には上記と同様の調整であろう。11には外面に縦ハケ、内面には斜めのハケ調整がわずかに確認出来る。15は口縁端部を欠くが、外反するものと見られ、外面は縦・斜めハケ、上段内面はナデ、下段内面には横・斜めのハケ調整が施されている。また、13には透孔の一部が残っているが、円形か巴形・勾玉形か種類は不明である。色調は11が明黄褐色、他は明橙色～橙色を呈し、赤色・白色粒子を多く含む胎土で、11には金色雲母も含まれる。15には小石も含まれる。また、凸帯に赤彩がわずかに残る。

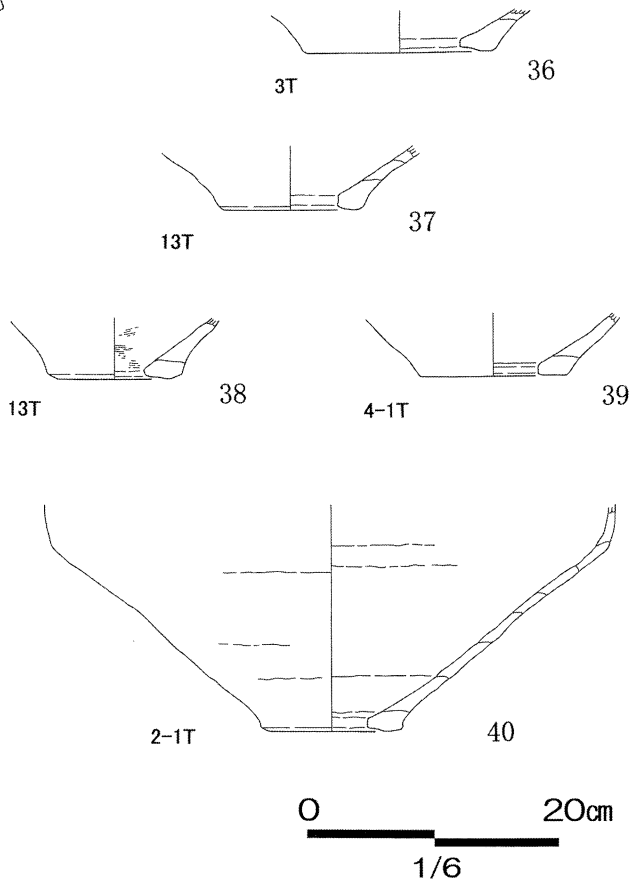
16は段部から口頸部下段を経て頸部にかけて約３分の２が残っており、段部には一部ではあるが凸帯も接合する。外面は斜め・縦ハケ調整、内面は指ナデ・ヘラナデ調整が見られる。色調は明黄褐色で、胎土には白色粒子が多く含まれる。本資料にも頸部凸帯はない。

17は段部の小破片である。凸帯は欠損している。色調は橙色～にぶい黄褐色で、やはり赤色粒子を多く含む。

18は口頸部下段の破片であるが、３・16より径が大きい。磨滅が著しく外面・内面とも調整は確認出来ず、内面に指ナデ・ヘラナデによる粘土紐の輪積痕跡の調整がわずかに見られる。橙色～明赤褐色の色調で、白色粒子・小石を多く含む胎土である。

19・20・23は口頸部下段の破片、21・22は上段の破片である。外面にはいずれも縦ハケ調整、19・20の内面の下端部と21の内面に横ハケ調整が見られる。色調は橙色～にぶい橙色で、20の内面は灰褐色





第５図　甲斐銚子塚古墳出土壺形埴輪（3）
（35は筆者再トレース、36～38は筆者実測、39・40は筆者再実測）

である。また、20の外面には赤彩が見られる。胎土はいずれも赤色粒子を多く含んでいる。

24はこれまで土師器の壺として報告されてきたものであるが、胎土や焼成は埴輪と同様であることから、新たに壺形埴輪として扱う。口頸部下段の下側から頸部、体部上半（肩部）にかけての破片資料で、口頸部下段がやや外反しており、この資料も二重口縁になるものと思われる。下段外面は縦・斜めのハケ調整で、頸部下にも縦ハケが見られる。体部は球形になると考えられ、肩部外面に綾杉状の刺突文を施す。内面には指ナデによる調整が確認できる。色調はにぶい黄褐色で、胎土には赤色・白色粒子を多く含んでいる。

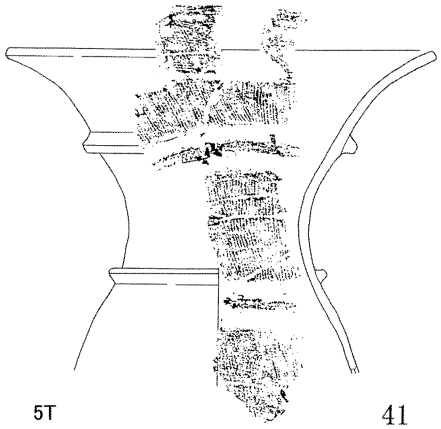
25～32は頸部から肩部にかけての破片、33・34は体部破片で、このうち28～32は同一個体である。25・26は磨滅により外面・内面とも調整は不鮮明で、26の内面には指ナデによる粘土紐の輪積痕跡の調整がわずかに見られる。27も外面・内面ともハケ調整は不鮮明であるが、28～32は外面に縦ハケ調整、内面は指ナデによる調整が、33は外面斜めハケ、内面は指ナデによる調整、34は外面・内面とも斜めハケ調整がそれぞれ行われている。色調について、25～27は橙色、28・29・31・32は外面にぶい褐色、内面灰褐色、30は外面にぶい橙色、内面明橙色、33・34はにぶい黄褐色である。胎土にはいずれも赤色粒子や金色雲母を含むものが多い。なお、31の外面に赤彩がわずかに確認できる。

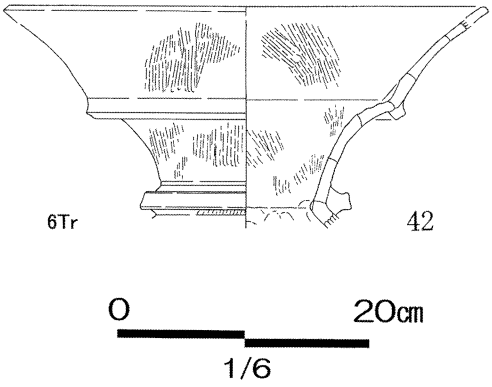
35ははじめに触れた通り、出土状況及び唯一全体の形状がわかる資料で、口縁部に三つ巴の透孔を４方向に持つ、甲斐銚子塚古墳を代表する出土品の一つである。観察は既に先の資料紹介において詳細に行われているので[11]、成形・調整方法についてはそちらに譲るとして、ここでは形態的な特徴を中心に、他の壺形埴輪と比較しながら改めて見てみたい。

全体の法量は口縁部径51㎝、底部径10.4㎝、高さ67㎝、体部最大径は41.3㎝を測り、口頸部については５・６と同様に上段が外反する二重口縁で、口縁端部には明瞭な強い面を持つ。上段・下段ともに高さは14㎝前後であり、３・６・16などと比較すると下段の高さが低い。報告されているように、頸部と体部は完全に接合していないが、頸部と体部の間の２㎝前後の空隙を考慮しても低く、外反する上段と下段の高さはほぼ同じに復元されている。そのため、頸部径も３や16に比べるとやや大きい（太い）印象を受ける。頸部凸帯の有無については不明であるが、今回他の資料を見ても貼り付けていないことが確認され、これは当初の予見通りである。体部については中央に最大径をもつ球胴であるが、24～31と比べると肩の張りが弱く、体部下半も窄まりが大きく、後述する40のようなタイプとも異なっている。底部は36～40を含め、すべて焼成前穿孔の平底である[12]。

36～40は体部の下端部～底部にかけての破片である。いずれも磨滅により外面・内面の調整は確認できないが、38の内面には横ハケによる調整が残っている。底部径は36が14.8㎝、37は10.4㎝、38は10.6㎝、39は11.6㎝をそれぞれ測る。色調について、36・40は明黄褐色、37・38は橙色、39はにぶい黄褐色を呈する。胎土には白色粒子や金色雲母を多く含む。40は体部下半から底部にかけてのもので、報告書では底部付近のみの実測図であったが、体部の破片資料があり、図上で復元した。磨滅により外面・内面とも調整は不明で、粘土紐の輪積痕跡が見える。体部の最大径は44.8㎝を測り、この部分に稜をもち屈曲し、ほぼまっすぐに底部に向かう。底部径は10.8㎝、胎土に赤色粒子・小石を含む。

以上が甲斐銚子塚古墳出土の主な壺形埴輪の概要であるが、この他、透孔のある破片についても報告されており、これらは35のように壺形埴輪を特徴づける重要な属性であるが、小破片では巴形・勾玉形であっても、朝顔形埴輪の可能性も比定できないことから、今回はあえて取り上げないことにした。





第６図　甲斐銚子塚古墳出土朝顔形埴輪
（41は筆者再トレース、42は筆者実測）

３．壺形埴輪の型式分類

それでは、これまで見てきた形態的特徴をもとに、甲斐銚子塚古墳の壺形埴輪を型式分類してみたい。とはいえ、全体の形状を窺える資料は依然として第５図35のみであり、したがって口縁部から頸部・屈曲部にかけての特徴がまず大きな指標ということになる。

その前に、同じ二重口縁を持つ朝顔形埴輪との区別の問題について触れておこう。両者の口縁部・頸部を比較してみると、朝顔形埴輪は頸部から段部をもたずそのまま大きく外反するもの（第６図41）と、明瞭な段部を持ち大きく外反するもの（同42）がある。口頸部の高さを見ると、下段は上段に比べ２割前後高くなっている。これに対し、壺形埴輪も口頸部上段は外反・外傾しているが、朝顔形埴輪より角度は小さい。また、高さは下段が上段よりさらに高くなる傾向にあるようで、二重口縁全体が長く立ち気味である。

さらに、頸部凸帯の有無も大きな指標で、上記のように壺形埴輪は頸部凸帯を持たず、頸部周辺は小破片でも壺形埴輪と判断できる。この他、色調に橙色のものが多いようで、口縁部から頸部・屈曲部まで復元可能な場合、現状ではこれらの点で朝顔形埴輪と区別することができる。

では、これらを踏まえ壺形埴輪を見てみると、まず、口縁部が外反するもの（２・５・６・15・35ほか）と、直線的に開くもの（１・３・４ほか）とに分類される。ここでは前者を口縁部１類、後者を口縁部２類とする。口縁端部にはほとんどのものが面を持つ。

次に、体部であるが、第５図35についてはやや肩の張りが弱いが、ほとんどは頸部からの屈曲が強い球胴を呈するものと見られる。これらを体部Ａ類とするが、第５図40は体部下半に稜をもち屈曲するもので、体部上半の形状は想定しにくいが、体部全体では長胴で下膨れになるかもしれない。これを体部Ｂ類とする。

これら口頸部上段と体部の組み合わせからは、大きくは２型式に、やや詳細に４型式が想定されることになる。つまり、球胴の体部を持ち口頸部上段が外反するものは壺形埴輪Ａ１類、上段がまっすぐ外傾するものが壺形埴輪Ａ２類となる。また下半部が屈曲し下膨れになると考えられる体部に口頸部上段が外反するものを壺形埴輪Ｂ１類、上段がまっすぐ外傾するものを壺形埴輪Ｂ２類として、ひとまず型式分類しておきたい。

さて、ここでもう一度、口頸部の高さに戻るが、第５図35は外反する口縁部及び球胴の体部から、壺形埴輪Ａ１類に分類される。しかし、前章で概観したとおり、下段の高さが他の壺形埴輪より低く、上段とほぼ同じ高さになっている。これについては坂本氏により、頸部と体部が完全に接合しておらず、第１次調査に伴う発掘調査当時の出土状況等に基づいて復元されたことが述べられている。他に確認出来た資料が少ない状況の中にあって、当時としてはきわめて妥当な復元だったといえるだろう。

今回掲載した他の資料を見てみると、壺形埴輪Ａ２類とした第３図３は、復元実測であるが上段の高さは推定で13㎝、下段は16.5㎝を測る。第４図16は上段を欠損しているが下段は高さ20.6㎝ある。東日本では、古墳時代前期後半から中期初頭にかけての壺形埴輪は体部が長胴化し、口頸部下段が大きく発達し、全体的に大型化する傾向にあることから、相対的に見ても上段の高さが下段を超えることは考えにくい。

したがって、具体的に上段と下段の高さの比率を表すことは難しいが、新たな資料に基づいて第５図35の口頸部下段の高さを推測すると17～18㎝となり、これまでより４㎝前後高くなる可能性があり、全体の高さも70㎝前後となることを提示しておきたい。

４．甲斐における墳墓の変遷と壺形埴輪

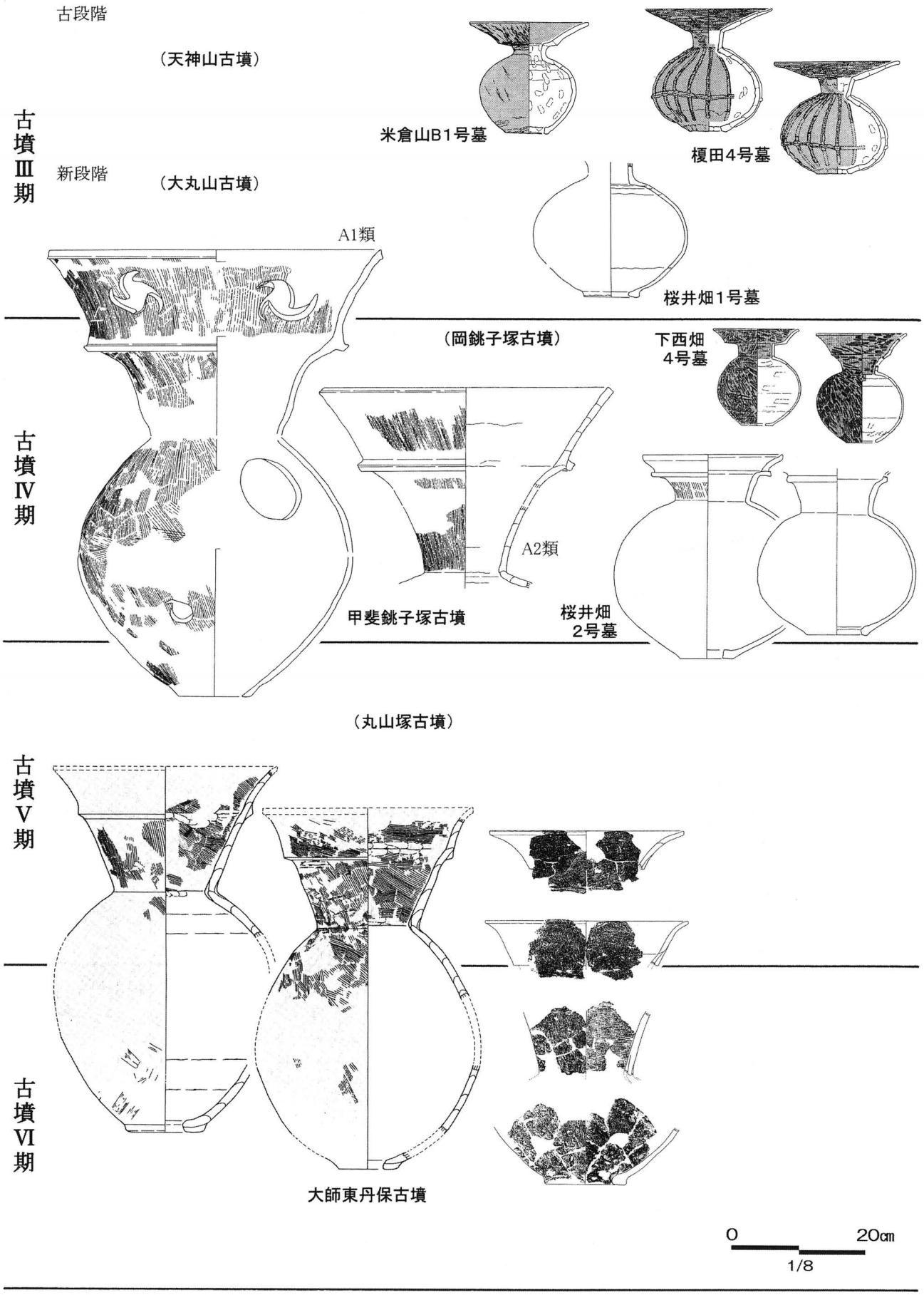
甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪について、一応整理できたところで、甲斐地域の壺形埴輪について、古墳時代の時間軸の中でもう少し詳しく見ていきたい。

甲斐銚子塚古墳は、筆者の古墳時代編年[13]の古墳Ⅳ期（４世紀後半）に位置づけられる（第７・８図）。土器編年では東海の松河戸Ⅰ式前半期、畿内の布留式中段階に併行する時期である。

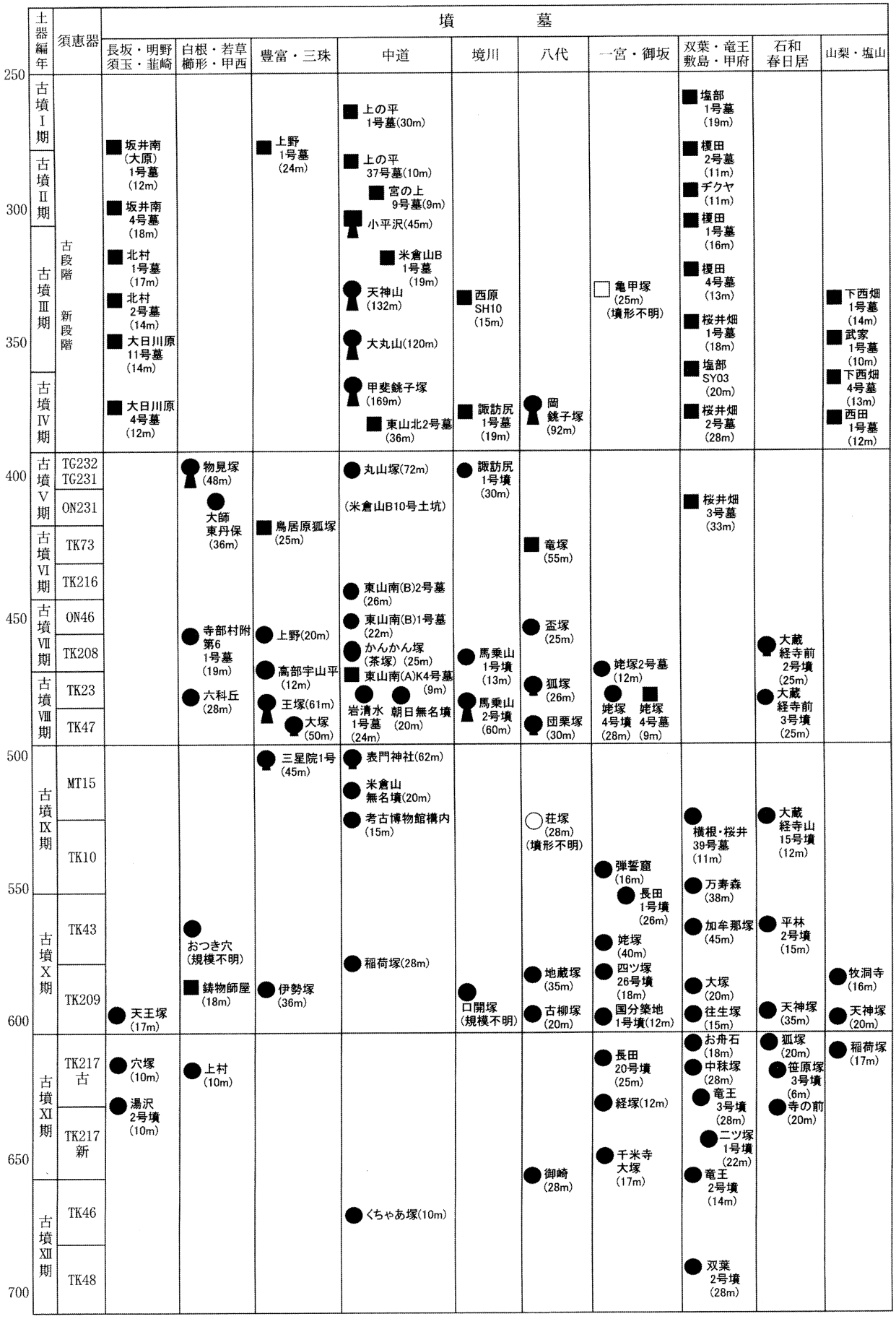
ところで、壺形埴輪の定義としては、底部穿孔された同じ規格（型式）の壺を多量に使用し、「囲繞配列」[14]することがまずもってあげられる。古屋紀之氏は全国各地の墳墓における底部穿孔壺の囲繞配列を詳細に分析しているが、東日本の古墳において円筒埴輪が採用される古墳時代前期後半以前には、畿内の影響下のもとで底部穿孔壺による囲繞配列が出現・定着していったと考えている[15]。一方、赤塚次郎氏は、壺をもって墳墓を囲繞する伝統は東海地域に淵源があるとし、壺形埴輪の系譜の一つが東海系にあることを述べている[16]が、両者とも壺が弥生墓制から続く伝統的な道具（祭器）であり、発信する側、受け入れる側の地域性・伝統性を強調している点は重要である。

甲斐での底部穿孔壺の初見は、古墳Ⅱ期（３世紀末～４世紀初頭）の甲府市榎田遺跡[17]２号方形周溝墓、市川三郷町上野遺跡[18]１号方形周溝墓であり、焼成前穿孔された同じ規格の在地系折り返し口縁壺、二重口縁壺などが２～３点ずつ出土している。どちらも周溝中に配置されたと考えられる。

次の古墳Ⅲ期（４世紀前半）になると、焼成前底部穿孔の壺が見られるようになる（第７・８図）。榎田遺跡４号方形周溝墓、米倉山Ｂ遺跡[19]１号方形周溝墓、桜井畑遺跡[20]１号方形周溝墓（いずれも甲府



第７図　甲斐地域における壺形埴輪の変遷



第８図　甲斐地域における墳墓の変遷（小林2010文献を修正）

市）、さらに古墳Ⅳ期の甲州市下西畑遺跡[21] 4号方形周溝墓、桜井畑遺跡2号方形周溝墓へと続く。これらの墳墓においても同規格の壺が2～3点出土している。遺存状況や調査の規模や状況にもよるかもしれないが、これらの壺の出土状況からは北関東や東北南部で見られるような囲繞配列といえるものではないだろう。しかし、方形周溝墓から同じ規格の壺が数点出土する状況は、弥生時代後期から見られるようで[22]、これは甲斐地域あるいは中部高地における地域性・伝統性ではないかと考えられる。

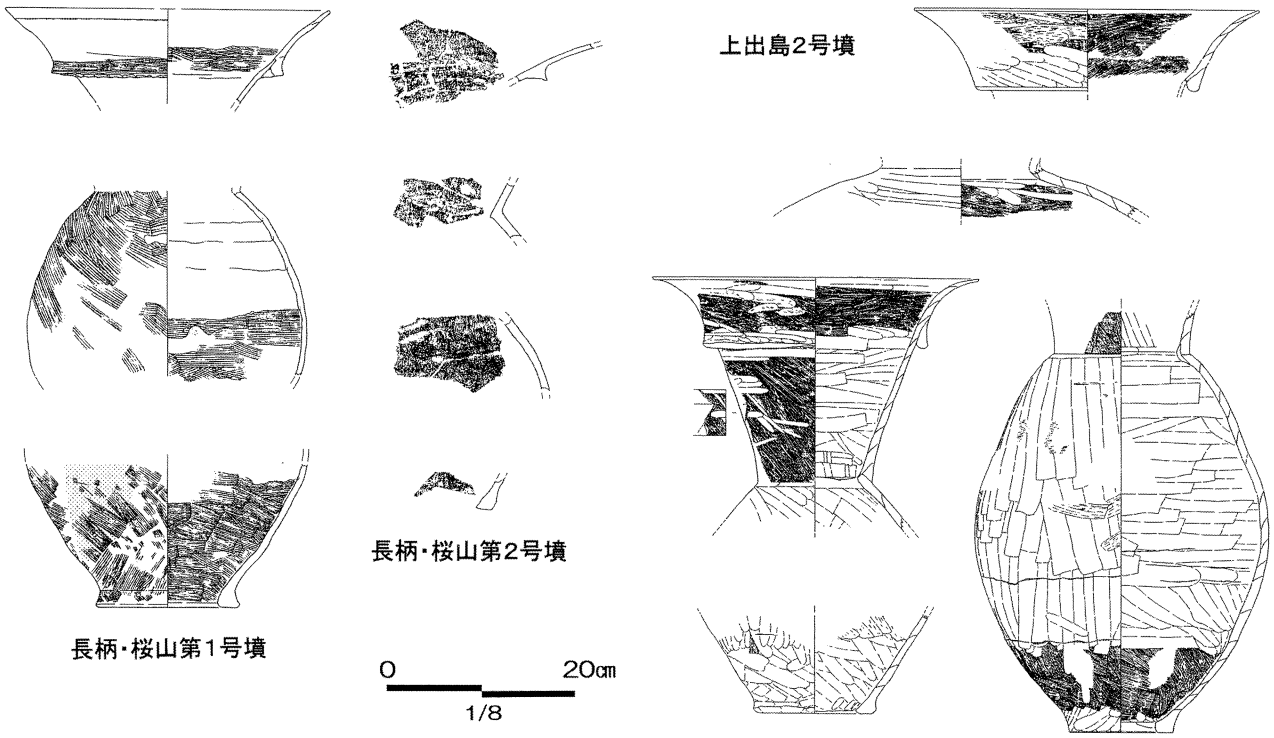
再び古墳に戻ろう。甲斐の前期古墳において壺形埴輪を持つのは、甲斐Ⅳ期の甲斐銚子塚古墳と、体部の破片が出土している旧八代地域の笛吹市岡銚子塚古墳[23]のみであり、甲斐Ⅲ期新段階に先行する旧中道地域の大丸山古墳（甲府市）では、現在まで埴輪の存在は知られていない。これに先行すると考えられる中道地域の天神山古墳（甲府市）では、以前から壺の破片が採集され、最近の調査においても底部穿孔の壺形土器が出土しており[24]、円筒埴輪導入以前の壺による囲繞配列になるかもしれない。甲斐地域最古の古墳である前方後方墳の小平沢古墳においては、墳丘で採集されたS字甕以外、壺に関する情報は明確ではない。

甲斐Ⅴ期（4世紀末～5世紀第1四半期）では、甲斐銚子塚古墳に隣接する丸山塚古墳から、甲斐銚子塚古墳と同様な円筒埴輪が出土している[25]。壺形埴輪が出土したとの報告もあるが、丸山塚古墳に埴輪の囲繞配列があったかどうかを含め、今後検討の余地があると思われる。

その後、壺形埴輪による囲繞配列を受け継いだのは、甲府盆地西部の低湿地に立地する大師東丹保古墳（南アルプス市）[26]である。直径36mほどの円墳と考えられる墳丘裾を壺形埴輪のみで囲繞配列を行っており、古墳周辺からまとまって出土した土師器とともに、古墳Ⅵ期（5世紀第2四半期）に編年してきた。

壺形埴輪は、口頸部外面に凸帯状の粘土紐を貼り付け二重口縁部状にしており、粘土紐の形状により2種類が認められ、口頸部上段も端部がわずかに外反するものと大きく外反するものがある。類似する例として、神奈川県逗子市・葉山町の長柄・桜山第1・2号墳[27]、茨城県坂東市（旧岩井市）上出島2号墳[28]からの出土がある（第9図）。大師東丹保古墳出土例も体部は長胴で、口頸部の外面・内面と体部外面は縦・斜めのハケ調整で、赤彩を施している。底部は厚みのある平底で、焼成前の底部穿孔である。これらの口頸部や体部の形態・製作技法などから、甲斐銚子塚古墳の壺形埴輪の系譜上にあり、その前段階に各地に普及した伊勢型二重口縁壺[29]をはじめ、多様な地域型の二重口縁部壺[30]の影響を受けてきたものと考えられるが、古墳の時期的な位置づけにはやはり問題があると考えていた。

体部の長胴化、口頸部下段の発達は、古墳時代前期後半から中期初頭にかけて東日本に盛行する形態である。これは「円筒埴輪に近づくための変化」[31]であり、赤塚氏の言うように、肩が張らない体部が長胴化



第9図　長胴の体部をもつ壺形埴輪

したものについて、時期を引き下げることにはやはり問題がある[32]。

であるから、大師東丹保古墳の築造年代については、東日本的視野で見ると、古墳Ⅴ期まで遡上する可能性があり、当初の年代観のとおり５世紀初頭[33]、下っても５世紀第１四半期、壺形埴輪の終末期[34]までであろう。

そうなると、同じ峡西地域にある前方後円墳の南アルプス市物見塚古墳[35]と同時期となり、両者の関係が問題になってくる。また、八代地域の大型方墳である笛吹市竜塚古墳[36]にはやや先行する可能性がでてくる（第８図）。これらの古墳は立地・墳形はそれぞれ全く異なるが、墳丘には葺石を備えている。しかし、埴輪を樹立したのは大師東丹保古墳だけである。規模は縮小しているが前方後円墳の物見塚古墳、埴輪をもつ大師東丹保古墳、そして伝統的な方形墳墓の復活ととらえられる竜塚古墳[37]、いずれもその後の古墳時代中期を予見させる状況であるが、これら中期前半の新たな動向については、稿を改めて考えることにしたい。

５．まとめ

甲斐銚子塚古墳の壺形埴輪については、現状では２種類４型式が想定される。口頸部上段に高さのある形態が特徴で、古墳時代前期では東日本最大級の規模を誇る畿内型の大型前方後円墳を囲繞する壺形埴輪であり、形態には強い規格制が見られる。しかし、副葬品の組み合わせと比較すると畿内の影響は薄く、埴輪製作そのものは周辺地域の二重口縁部壺の影響を受けながら「地域や被葬者の主体的な選択」[38]により、甲斐地域の中で主体的に行っていたことが考えられる。

また、それに先だって、弥生時代以来の伝統的墓制である方形周溝墓においては、底部穿孔壺を使用し、囲繞配列とはいえないまでも、それを意識した祭祀が行われていた様子が見受けられ、４世紀後半まで続く。同じ頃、古墳には円筒埴輪の波及とともに壺形埴輪として大型化し古墳に樹立され、５世紀初頭まで続く。甲斐ではその後しばらく古墳に埴輪を巡らすことはなく、囲繞配列が見られるようになるのは、やはり５世紀後半まで待たなければならないようである。

６．おわりに

甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪について、新旧の資料をもとにおおまかではあるが分類し、位置づけを行ってきた。はじめにも述べたとおり、円筒形埴輪・朝顔形埴輪の再検討がひとまず今後の大きな課題である。

長きにわたる埴輪研究は、現状では製作技法等の分析などを経て、より詳細な方向へと進んでいる。今回、このような拙稿を著したこと自体、今更時代遅れかもしれない。しかしながら、数量的に少ないとはいえ、甲斐の埴輪研究が十分進んでいるかといえば、決してそうは思えない。その意味でも、「甲府盆地から見たヤマト」はまだ続けなければならない。

註

（１）小林健二 2006『甲府盆地から見たヤマト－甲斐銚子塚古墳出現の背景－』山梨県立考古博物館

（２）小林健二 2007「甲府盆地から見たヤマト（１）－甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品－」『研究紀要』23　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

小林健二 2007「甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品について」『専修考古学』第12号

（３）松平定能編 1814『甲斐国志』巻之四十二　古跡部第五　八代郡中郡筋（雄山閣 1970『甲斐国志』第２巻に所収）

上田三平 1928「銚子塚を通して観たる上代文化の一考察」『史学雑誌』第39編第９号

（４）上田宏範 1959「埴輪の諸問題」『世界考古学大系』第３巻　日本Ⅲ　平凡社

上田宏範 1961「壺形土器」『桜井茶臼山古墳附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊

近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第３号　考古学研究会

近藤喬一・都出比呂志 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第６号　史学研究会

川西宏幸 1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２・４号　日本考古学会（1988『古墳時代政治史序説』塙書房に補筆、所収）　など

なお、埴輪の研究史については、以下に詳しく記載されている。

車崎正彦 2004「総説 埴輪」『考古資料大観』第４巻　弥生・古墳時代　埴輪　小学館

（５）橋本博文 1978「甲斐における在地首長制の成立とその展開」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』24

橋本博文 1980「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』第８号　甲斐丘陵考古学研究会

（６）高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会

（７）坂本美夫 1988『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会

（８）坂本美夫 1987「甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴

輪」『考古学雑誌』第72巻第４号　日本考古学会

（９）吉岡弘樹 2002『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会

森原明廣・守屋文子 2005『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会

笠原みゆきほか 2008『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会

(10) 置田雅昭 1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第３号　日本考古学会

山根洋子 1992「第５節 出土埴輪」矢島宏雄編『史跡森将軍塚古墳』更埴市教育委員会

廣瀬覚 2001「茶臼山形二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会　など

(11) 註（８）文献に同じ。

(12) 橋本氏の文献（註５）の中で、甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪の底部破片２点の実測図が掲載されているが、このうち１点は平底ではなく、下方に突出したものである。また、もう１点は平底であるが底部穿孔は見られないようである。しかし、この２点の資料について筆者は実見していないので、現時点でこれらの存在は保留にしておきたい。

(13) 小林健二 2010「古墳時代における甲斐の地域社会－土器編年と墳墓の変遷－」『山梨県考古学協会誌』第19号　山梨県考古学協会

小林健二 2010「古墳から見た甲斐の地域社会」『専修史学』第48号　専修大学歴史学会

(14) 古屋紀之 2004「底部穿孔壺による囲繞配列の展開と特質－関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に－」『土曜考古』第28号　土曜考古学研究会

古屋紀之 2005「土器・埴輪配置から見た東日本の古墳出現」東北・関東前方後円墳研究会編『東日本における古墳の出現』六一書房

(15) 古屋紀之 2007「第６章　囲繞配列」『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣

(16) 赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳発掘調査報告書』犬山市教育委員会

(17) 高野玄明 1995『榎田遺跡』山梨県教育委員会ほか

(18) 堀ノ内泉 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会

(19) 坂本美夫ほか 1999『米倉山Ｂ遺跡』山梨県教育委員会ほか

(20) 中山誠二 1990『桜井畑遺跡Ａ・Ｃ地区』山梨県教育委員会ほか

(21) 保坂和博・石神孝子 2002『下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』山梨県教育委員会ほか

(22) 中山誠二 1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題－時間軸の設定－」『研究紀要』９　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

(23) 伊藤修二 1995『山梨県指定史跡　岡・銚子塚古墳』八代町教育委員会

(24) 山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会 2012『2012年度上半期遺跡調査発表会要旨

(25) 註（５）及び（７）文献に同じ。

(26) 保坂和博 1997『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県教育委員会ほか

(27) 依田亮一・柏木善治 2001『長柄・桜山第１・２号墳』神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団

(28) 大森信英ほか 1975『上出島古墳群』岩井市教育委員会

日高慎・田中裕 1996「６．上出島２号墳出土遺物の再検討」岩井市史編さん委員会『岩井市の遺跡Ⅱ』岩井市史遺跡調査報告書　第２集

(29) 田口一郎 1981『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会

田口一郎 2001「東海系土器の末裔たち」『第９回春日井シンポジウム資料集』第９回春日井シンポジウム実行委員会

(30) 比田井克仁 1995「二重口縁壺の東国波及」『古代』第100号　早稲田大学考古学会

赤塚次郎 2002「総説　土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観』第２巻　弥生・古墳時代土器Ⅱ　小学館

(31) 註（15）文献に同じ。

(32) 2000（平成12）年４月に山梨で開催された埴輪研究会において、５世紀前半代の新しい時期に比定される壺形埴輪とされていた。

(33) 註（26）文献及び保坂和博 1999「埴輪」『山梨県史』資料編２　原始・古代２　山梨県

(34) 塩谷修 1992「壺形埴輪の性格」『博古研究』第３号　博古研究会

(35) 松浦宥一郎ほか 1983『物見塚』櫛形町教育委員会・物見塚古墳環境整備調査委員会

田中大輔 2007『山梨県指定史跡 物見塚古墳』南アルプス市教育委員会

(36) 伊藤修二 2004『竜塚古墳』八代町教育委員会

(37) 小林健二 2008「方形周溝墓と方墳―竜塚古墳出現の背景―」『山梨県考古学協会誌』第18号　山梨県考古学協会

(38) 高橋克壽 1998「古墳時代の造形－埴輪」『考古学による日本歴史』12　芸術・学芸とあそび　雄山閣

甲州石大工道具ついて
ー大澤・横内氏使用の近・現代資料と活用事例ー

野　代　幸　和・長　田　隆　志

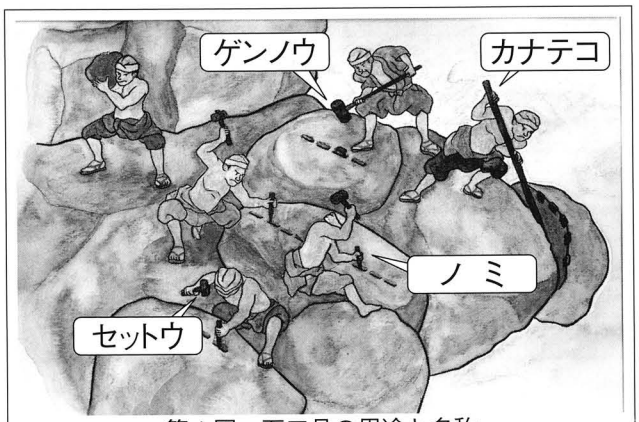
1　はじめに
2　大澤兵次郎・安國氏使用の道具（旧牧丘町）
3　横内八郎氏使用の道具（韮崎市）
4　課題と活用

1　はじめに

今回ここで紹介する石工具は、甲府城と関連した伝統技術研究の一環で調査を行った一部を紹介するものである。

これら石工具は石垣や石造物の加工には欠かすことのできない道具であるが、機械化に伴い手道具が使用されなくなると共に、職人の減少なども影響しその利用方法も徐々にわからなくなりつつある。現在伝わる道具類の主なものは概ね近代以降のものであり、近世以前の石工技術は絵図や文書といった文献からしか知ることができず不明な点が多い。また、職人技術といった地味な部分も手伝ってなかなか研究が進んでいないのも現状である。

今回取り扱う資料は、実際に使用されていた工具類であり、かつて花形産業だった石工業の遺産である。使用されていた方々はすでに他界されており、具体的な使用方法や名称、年代など不明な点が多いが、ご子孫の方々から聞き取りによって判明したことについては、表などの中に記載した。これらの道具やその組成は、いにしえから続く石工技術を考えていく上では貴重な資料と考えられるためこの場を借りて資料紹介することとした。道具の年代については概ね50年以上経過したものがほとんどであり、これらを詳細に観察していくとよく手入れされ使い込まれており、熟練した職人による使用の痕跡が窺える。本紙面を利用してこれらを紹介すると共に、若干の検討などを試みたい。



第１図　石工具の用途と名称

石工具の使用状況

第１図に基本的な石工道具の用途と名称を示した。本稿でいう石工具とは、主に採石・加工・運搬用具であり、採石用具としての用途についてはこの図で理解していただけると思う。

2　大澤兵次郎・安國氏使用の道具（旧牧丘町）

平成21年6月4日、山梨市教育委員会より古い工具類の処分を予定しているお宅（山梨市牧丘町西保下）があるという連絡を受け、共同で現地調査を実施した。歴史的には公的に木材の伐採や製材を営むことができた大鋸・杣衆の地域であり、その流れを組む職人の道具と推定された。聴き取りによれば大工の傍ら、曳き屋などを行っており、金桜神社の修復等にも携わっていたとのことであった。現地調査の結果、多種多様な道具類の存在が明らかとなったが、時代的には明治から昭和にかけてのものであり、道具の組成を知る上でとても貴重なものであることがわかった。現所有者で甲斐市在住の瀬戸やす代（旧姓大澤）氏によれば、「父や祖父の遺品でもあり、今まで大切に保管してきたものなので、有効に活用できるものであれば活用してもらいたい。」との申し出を受けたことから、道具類の分類調査を行わせて頂いた。

○使用者情報

所有者の父：大澤安國（M43生まれ）〔故人〕、祖父：兵次郎(M2生まれ)〔故人〕

聞き取りに寄れば本業の大工の傍ら頼まれればなんでも行ったということで、多種多様な工具565点が認められたが、本稿では石工関連資料に限定して紹介する。大別すると石工具、鍛冶具、運搬具がある。石工具は10種類19点、鍛冶具19種類40点、運搬具15種類46点の44種類105点である。鍛冶具の充実性から道具を丁寧に手入れしていた姿が窺える。現存していなかったが、人力巻き上げ機である神楽桟（かぐらさん）なども所有していたようである。道具の一覧は第１表に示したとおりである。

第１表　大澤兵次郎・安國氏使用の道具一覧

（石工具）・・・1

番号	器種	点数	計測値（cm）	重量(kg)	備考
O -1-1	グンデラ	1	23.5 × 14.0 × 5（刃部）		
O -1-2	グンデラ	1	25.5 × 12.5 × 4.3（刃部）		
O -1-3	グンデラ	1	14.2 × 4		本体のみ
O -1-4	メタテ	1	20.5 × 14.0 × 5.5（刃部）		
O -1-5	カタハ	1	13.0 × 3.3		本体のみ、「兵」の刻印
O-1-6	ビシャン	1	29.5 × 11.0 × 4.0 角		
O-1-7	ヤ	1	10.5 × 3.0		木割り用か？ハラシヤとして使用
O-1-8	セリヤ	1	3.6 × 1.8 × 1.6		側面に「十」の線刻
	セリヤ	1	3.8 × 2.2 × 2.2		
O-1-9	トビヤ	1	4.3 × 2.5 × 1.9		
	トビヤ	1	5.0 × 2.6		刃部欠損
	トビヤ	1	4.2 × 2.7 × 2.3		
	トビヤ	1	4.6 × 2.5		刃部欠損
O-1-10	マメヤ	1	4.2 × 3.4 × 3.0		
	マメヤ	1	4.3 × 3.5 × 2.8		
O-1-11	ヤ	1	7.0 × 4.3 × 6.0（刃部）		斧転用、楔的に利用か
O-1-12	ハリマワシ	1	51.0 × 18.5 × 6.0（頭部巾）		柄部は鉄棒だったが、木製に取り換え
O-1-13	セットウ	1	9.0 × 4.0		頭部のみ
	セットウ	1	8.5 × 4.0		頭部のみ

（鍛冶具）・・・4

番号	器種	点数	計測値（cm）	重量(kg)	備考
O-4-1	メキリ	1	32.0 × 13.0 × 3.0（刃部）		
O-4-2	ヤキヒバシ	1	36.5		
O-4-3	ヤキヒバシ	1	24.5		小型
O-4-4	カジバサミ	1	19.5		
O-4-5	ポンチ	1	11.1 × 1.3（刃部）× 0.9（巾）		
	ポンチ	1	6.9 × 1.0（刃部）× 1.4（巾）		
O-4-6	エヌキ	1	22.6 × 8.2		頭部の内側が内湾する
O-4-7	玄翁	1	5.0 × 2.1		頭部のみ
	玄翁	1	10.2 × 3.2		頭部のみ
	玄翁	1	9.0 × 3.5		頭部のみ
O-4-8	スミトリ	1	25.5 × 15.5		
O-4-9	弾鋳造具	1	22.7		
O-4-10		1	32.5, 刃部 7.8		刃物をしごく道具
O-4-11	金槌	1	34.0 × 10.7		
O-4-12	金槌	1	25.2 × 4.7		
O-4-13	金槌	1	23.4 × 8.8		
O-4-14	金槌	1	8.7 × 5.9		頭部のみ、破損、柄穴は丸
O-4-15	金床	1	13.2 × 4.7		円形
O-4-16	金床	1	13.0 × 10.8 × 10.7		
O-4-17	金床	1	13.05 × 5.2 × 6.4		
O-4-18	楔	1	11.7 × 3.1		四角柱
O-4-19	ノミ	1	16.0 × 2.2 × 1.6		先端が潰れている。断面形は不整六角形
O-4-20	ヨーヌキ	1	15.0 × 1.9 × 1.5		断面形は長方形
O-4-21	ポンチ	1	11.5 × 1.6		断面形は八角形、先端は丸
O-4-22	ポンチ	1	8.8 × 1.4		断面形は八角形、先端は四角
O-4-23	ポンチ	1	7.8 × 1.2		断面形は八角形、先端は丸
O-4-24	ポンチ	1	5.2 × 1.5		断面形は四角形、先端は丸
O-4-25	ポンチ	1	(4.1) × 1.0		断面形は四角形、先端は長方形。破損

O-4-26	ポンチ	1	6.0 × 1.0		断面形は四角形、先端は長方形。
O-4-27	ポンチ	1	6.1 × 0.8		基部変形。断面形、先端は長方形。
O-4-28	ポンチ	1	6.4 × 0.8		断面形、先端は四角形。
O-4-29	ポンチ	1	17.0 × 1.4		断面形、先端は四角形。
O-4-30	ヨーヌキ	1	10.0 × 2.4		
O-4-31	エヌキ	1	15.0 × 1.4		頭部、断面形は四角形。
O-4-32	エヌキ	1	(8.2) × 0.9		頭部は長方形、断面形は四角形。
O-4-33	エヌキ	1	9.0 × 1.8		断面形は四角形。
O-4-34	エヌキ	1	5.9 × 1.0 ×刃部 2.2		ノミ状
O-4-35	ヤスリ	1	8.0 × 0.9		ポンチ転用か
O-4-36	ノミ	1	(9.5) × 1.0		鑿に転用か
O-4-37	釘	1	15.4 × 0.8		エヌキに転用か。頭部は長方形。

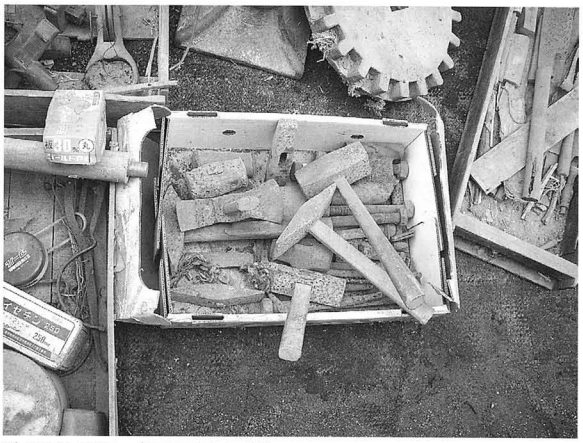
(運搬具)・・・2

番号	器種	点数	計測値 (cm)	重量(kg)	備考
O-2-1	キリンジャッキ	1	35.5 × 21.5		
O-2-2	キリンジャッキ	1	35.5 × 21.5		台部は 10.9 cm
O-2-3	キリンジャッキ	1	35.5 × 21.5		方耳なし
O-2-4	キリンジャッキ	1	32.9 × 21.5		両耳なし。基部に「八寸」と記載
O-2-5	キリンジャッキ	1	35.1 × 21.5		
O-2-6	キリンジャッキ	1	32.4 × 21.5		基部に「八寸」と記載。
O-2-7	ジャッキ (小)	1	17.4 × 7.5		台部は 5.5 cm
O-2-8	ウインチ	1	25.2 × 9.2		
O-2-9	ウインチ	1	26.0 × 10.0		
O-2-10	滑車	1	23.5 × 14.5		金属
O-2-11	定滑車	1	61.5 × 21.8		金属。三連型。滑車一点欠失。
O-2-12	定滑車	1	66.4 × 21.3		金属。三連型。滑車二点欠失。
O-2-13	定滑車	1	46.9 × 13.6		木製。三連型。紐装着部穴二つ
O-2-14	定滑車	1	42.5 × 14.2		木製。三連型。紐装着部穴一つ
O-2-15	定滑車	1	35.6 × 17.2		木製。紐装着部穴一つ
O-2-16	定滑車	1	20.8 × 8.0		木製。紐装着部穴二つ
O-2-17	滑車セット	1	22.5 × 9.5 (定滑車)	並列二連	木製。定滑車、動滑車、フックが一体化。
			13.0 × 9.0 (動滑車)		
			10.5 × 5.0 (フック)		
O-2-18	動滑車フック	1	56.0 × 15.5		金属。上下にフック
O-2-19	動滑車フック	1	46.8 × 16.0		
O-2-20	滑車 (輪)	1	径 18.0		木製
O-2-21	滑車 (輪)	1	径 12.0		木製
O-2-22	滑車 (輪)	1	径 8.0		木製
O-2-23	レンチ	1	全長 29.6		ジャッキの巻き上げ用か
O-2-24	レンチ	1	全長 30.5		ジャッキの巻き上げ用か
O-2-25	背負子	1	60.0 × 37.5		
O-2-26	コロ	16	22.6 ×径 2.75		木製、棒型
	コロ	1	21.0 ×径 2.7		鉄製、管型
	コロ	1	20.5 ×径 2.7		鉄製、管型
	コロ	1	20.0 ×径 2.7		鉄製、管型
	コロ	8	18.2 ×径 2.7		鉄製、管型
	コロ	3	19.5 ×径 2.7		鉄製、木が入っている、管型
	コロ	1	17.5 ×径 3.4		鉄製、管型
	コロ	1	19.4 ×径 2.6		鉄製、管型
	コロ木箱	1	31.0 × 22.0 × 13.0		木製
O-2-27	コロ木箱	1	57.5 × 22.0 × 8.4		木製
	コロ	30	17.5 ×径 2.5		鉄製、棒型
	コロ	8	18.5 ×径 2.6		鉄製、管型
O-2-28	コロ木箱	1	58.0 × 22.0 × 8.5		木製、2-27 と同型、コロ入り、荒縄で封印
O-2-29	鉄板	18	38.0 × 9.6 × 1.4 内外	3	
O-2-30	鉄棒	2	57.5 ×径 2.2		ジャッキの巻き上げ用
			52.7 ×径 2.2		
O-2-31	鉄棒	1	37.0 ×径 1.9		ジャッキの巻き上げ用
O-2-32	滑車	1	40.6 × 18.0		鉄製、縦二連
O-2-33	滑車 (輪)	1	径 9.0		鉄製
O-2-34	フック	1	26.0 全長		連結部破断
O-2-35	フック	1	15.8 全長		
O-2-36	ジャッキ	1	32.6 × 21.8		底部一部破損

現地調査状況（ジャッキ・滑車など）

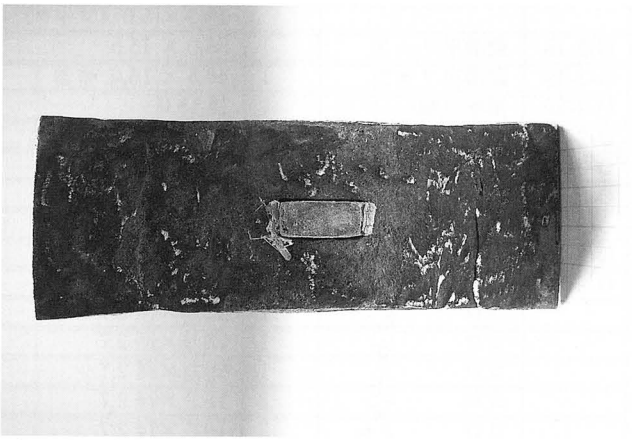
現地調査状況（水量り・コロなど）

現地調査状況（山道具など）



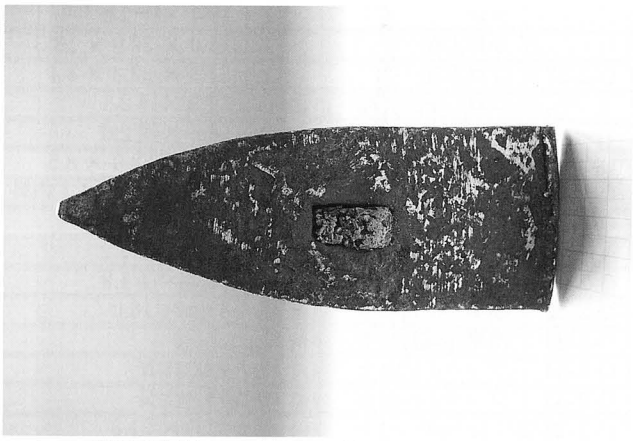
現地調査状況（石工具など）

グンデラ（整形用具）側面　石工具



グンデラ（整形用具）正面　石工具

メタテ（彫刻用具）側面　石工具



メタテ（彫刻用具）正面　石工具

ビシャン（整形用具）側面　石工具

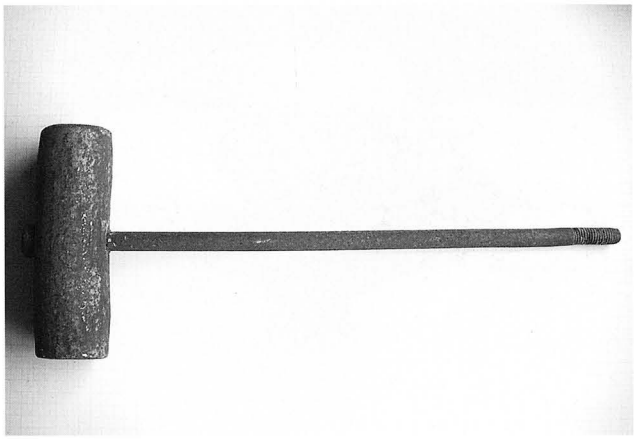
ビシャン（整形用具）打部　石工具

マメヤ（小割用具）正面　石工具

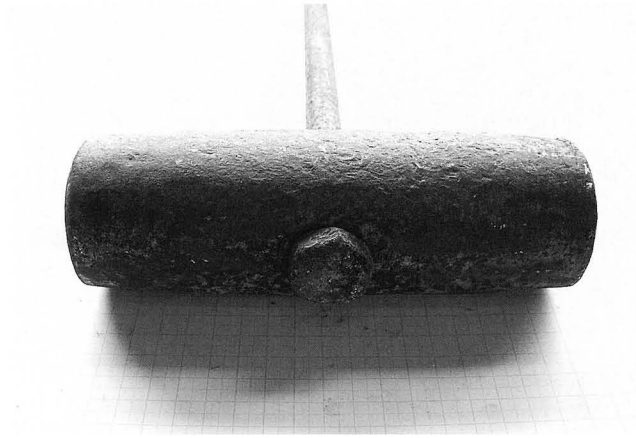
マメヤ（小割用具）側面　石工具

トビヤ（小割用具）正面　石工具

トビヤ（小割用具）側面　石工具



ハリマワシ側面　石工具

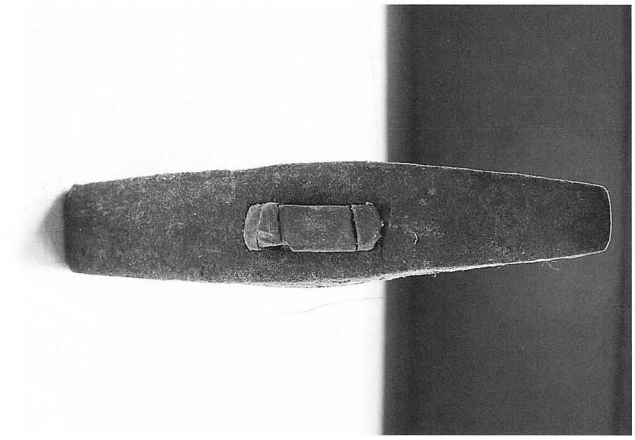


ハリマワシ基部　石工具

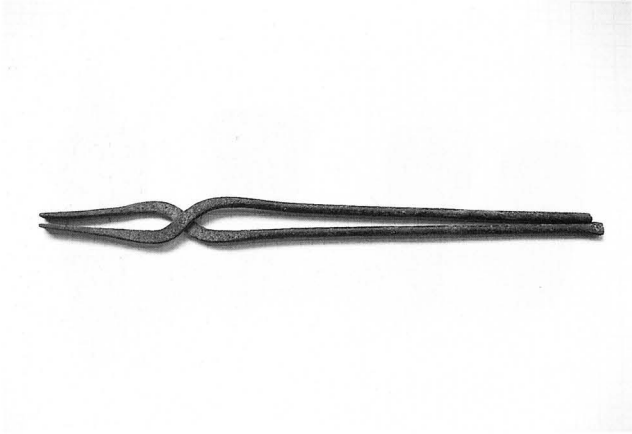
メキリ側面　鍛冶具

メキリ基部　鍛冶具

エヌキ側面　鍛冶具



エヌキ基部　鍛冶具

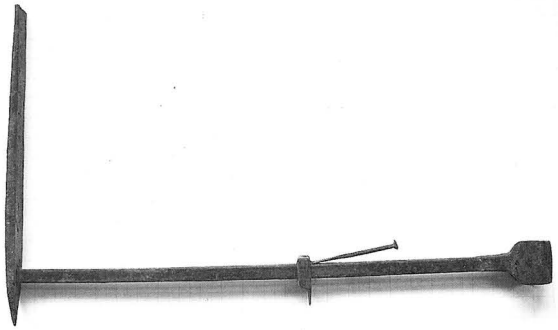


ヤキヒバシ　鍛冶具

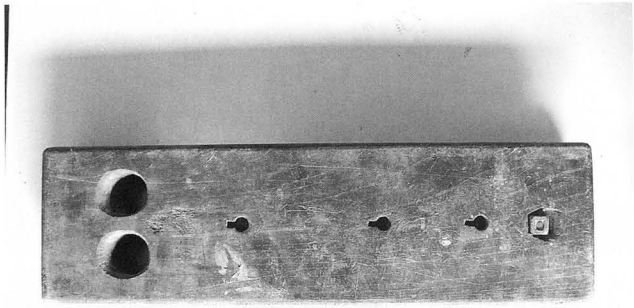
ポンチ　鍛冶具

ヤキヒバシ　鍛冶具

ヤキヒバシ基部　鍛冶具

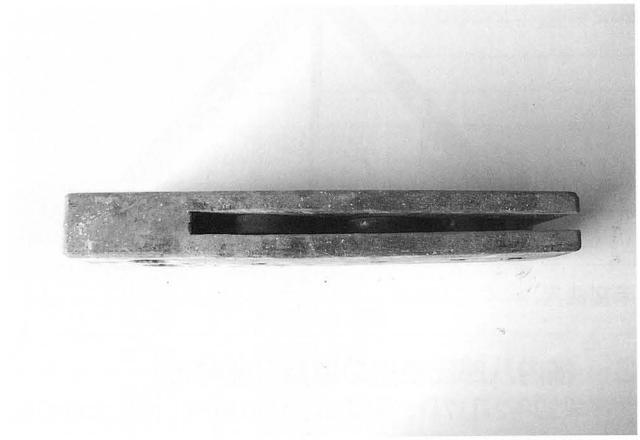


スミトリ　側面　石工・鍛冶具

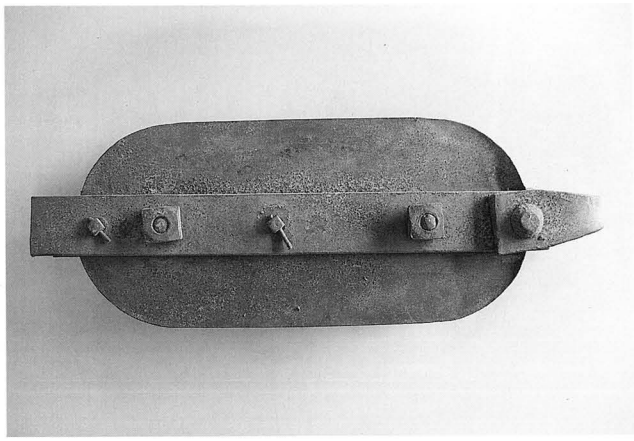


木製定滑車　正面　運搬具

スミトリ　基部　石工・鍛冶具

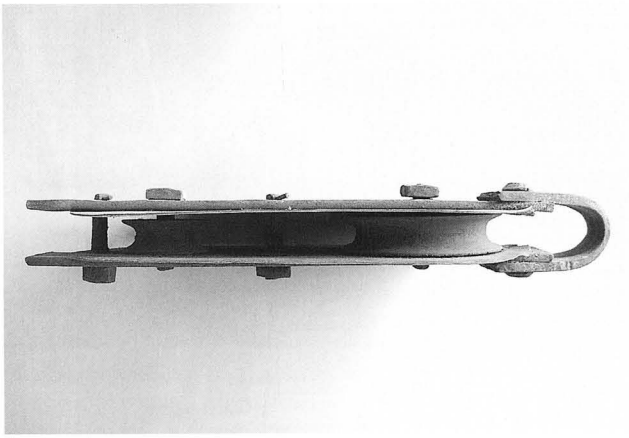


木製定滑車　側面　運搬具

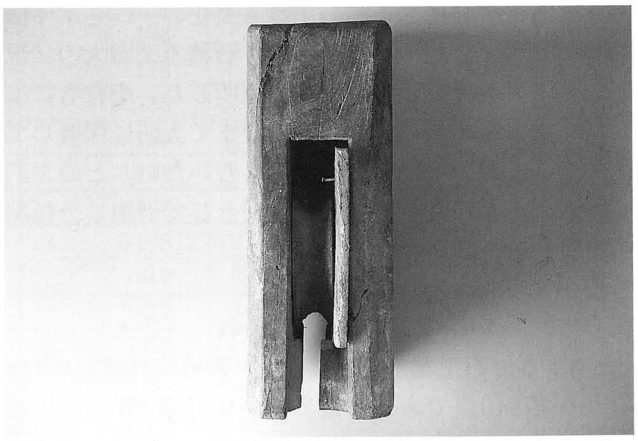


金属製定滑車　正面　運搬具

木製定滑車　正面　運搬具

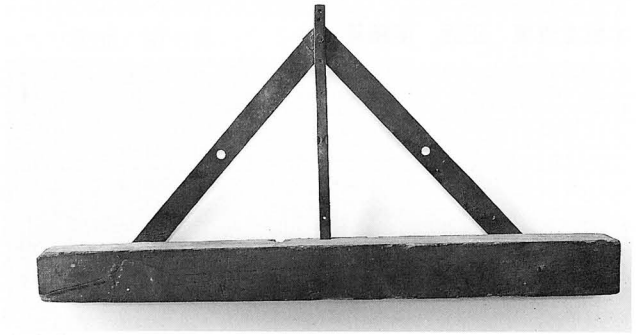


金属製定滑車　側面　運搬具



木製定滑車　側面　運搬具

キリンジャッキ　運搬具



南蛮曲尺

3　横内八郎氏使用の道具（韮崎市）

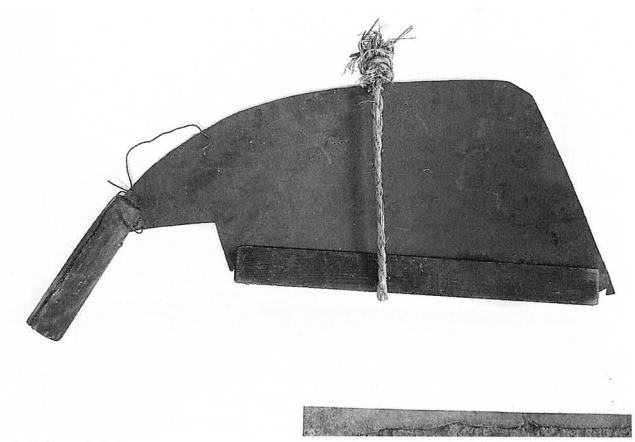
平成22年2月17日、甲斐市在住の横内　博氏より石工資料の所蔵に関係する情報提供を受け、現地調査をさせて頂いた。工具類の現所有者は横内恭二（韮崎市竜岡町若尾新田）の父であり、およそ４０年前まで石垣石工を行っていたとのことである。現地調査を行ったところ、石工具（矢締、石頭、矢、ノミ、タタキ、オシキリなど）、鍛冶具（鞴、焼火箸など）、運搬具（鉄製滑車）など多数存在することが判明した。一見したところ時代的には戦後期から昭和40年代までを中心としたものであるが、石垣石工の貴重な資料が残っていることが分かった。残念ながら手入れに使った焼き筒等は現在不明とのことであった。釜無川や塩川で転石を利用した間知石の製作、石積みに関わっていた。所有者も子供の頃一緒に手伝ったとのことであった。

これらの資料は、甲州石工職人文化の一端を示す伝統技術資料として一括性があり、石積み系職人の状況がわかる貴重なものである点が判明した。所有者によれば、「亡父の遺品でもあり、今まで大切に保管してきたので、ぜひ有効に活用してもらいたい」とのお話をいただいたことから、研究資料として借用し分類調査を行わせて頂いた。

○使用者情報

所有者の父：横内八郎（Ｔ３生まれ）〔故人〕

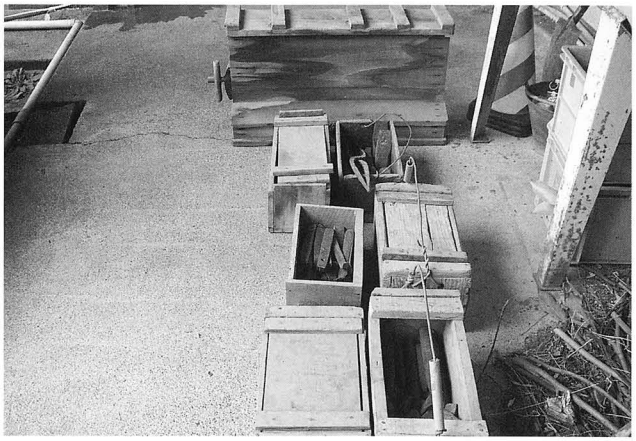
大別すると石工具26種類326点、鍛冶具4種類14点合計30種類340点である。道具の一覧は第2表に示したとおりである。



大鋸　山具

水量り

現地調査状況（矢締め・ノミ類）



現地調査状況（鞴・道具箱類）

第２表　横内八郎氏使用の道具一覧

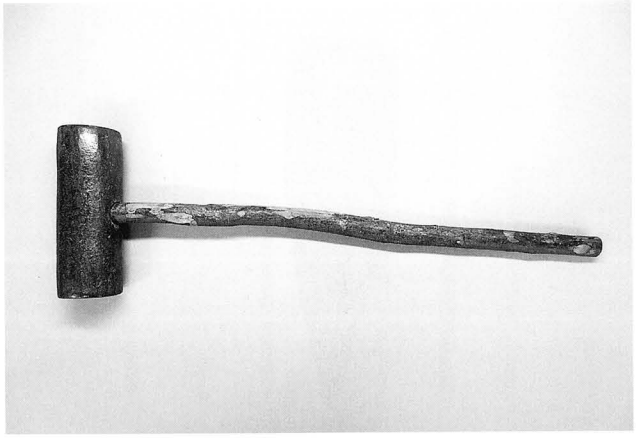
（石工具）

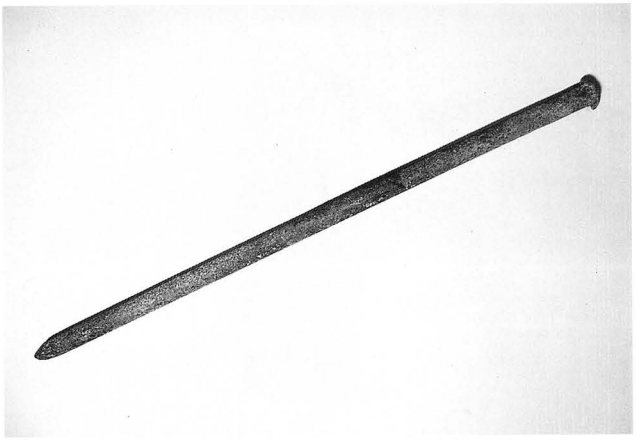
番号	器　　種	点数	計測値（cm）	重量（kg）	備　　考
1	矢締め	2	33	11.5	大玄翁、「一山・金八」の刻印あり
2	ハリマワシ	1	17.5	4.2	
3	セットウ	1	14.8	2.7	
4	グンデラ	1	14.2	0.9	
5	オシキリ	2	14・11.5	1.1・0.95	
6	カタハ	2	17・8.5	2.1・0.32	
7	ルートハンマー先端	3			
8	道具箱	7			
9	斧刃部	1	27.3	2.46	
10	替柄	8			
11	コロ	1	64 ×径 3		
12	焼印	1			五
13	滑車	1			
14	折れ尺	1			
15	ヤ	2		0.061	断面形長方形
16	ヤ	6		0.077	断面形長方形
17	ヤ	13		0.086	断面形長方形
18	ヤ	9		0.094	断面形長方形
19	ヤ	5		0.096	断面形方形
20	ヤ	13		0.109	断面形長方形
21	ヤ	4		0.109	断面形方形
22	ヤ	4		0.109	転用矢
23	ヤ	4		0.119	断面形長方形
24	ヤ	5		0.117	断面形方形
25	ヤ	6		0.126	断面形長方形
26	ヤ	4		0.121	断面形方形
27	ヤ	1		0.12	転用矢
28	ヤ	9		0.134	断面形長方形
29	ヤ	2		0.134	断面形方形
30	ヤ	2		0.134	転用矢
31	ヤ	6		0.147	断面形長方形
32	ヤ	4		0.146	断面形方形
33	ヤ	1		0.146	転用矢
34	ヤ	1		0.156	断面形長方形
35	ヤ	1		0.156	断面形方形
36	ヤ	6		0.162	断面形長方形
37	ヤ	1		0.162	転用矢
38	ヤ	4		0.173	断面形長方形
39	ヤ	4		0.178	断面形方形
40	ヤ	2		0.173	転用矢
41	ヤ	2		0.188	断面形長方形
42	ヤ	4		0.188	断面形方形
43	ヤ	2		0.188	転用矢
44	ヤ	2		0.198	断面形長方形
45	ヤ	2		0.195	断面形方形
46	ヤ	13		0.2	断面形長方形
47	ヤ	5		0.2	断面形方形
48	ヤ	5		0.3	断面形方形
49	ヤ	3		0.4	断面形方形
50	ヤ	5		0.4	断面形長方形

51	ヤ	1		0.4	破損している
52	ヤ	2		0.5	断面形長方形
53	ヤ	2		0.5	断面形方形
54	ヤ	7		0.22	転用矢
55	ヤ(大型)	1	19.2	1.8	孔あり
56	ヤ(大型)	1	15.5	1.85	
57	ハラシヤ	1	13.7	0.4	
58	ハラシヤ	1	14.5	0.4	
59	ハラシヤ	1	13	0.7	
60	ヤ?	1	8.5	0.32	
61	ヤ	1	5.3	0.18	
62	ヤ	1	5.7	0.25	
63	ヤ	2	9.5	0.65	
64	ヤ	1	9.8	0.46	
65	ヤ	1	10.5	0.62	
66	ヤ	1	11	0.68	
67	ヤ	1	13	1	
68	ヤ	1	15	1.9	
69	ヤ	1	8.5	0.3	縦に溝あり
70	ヤ	1	12.5	1	縦に溝あり
71	ヤ	1	13	1.2	縦に溝あり
72	マルノミ	12	20.0～23.5	0.85～1.3	ボート丸、先端は四角錐
73	マルノミ	14	15.5～27.5	0.3～0.95	ボート八角、先端は四角錐
74	底突きノミ	12	12.5～25.5	0.3～0.9	ボート丸
75	底突きノミ	10	17.0～24.5	0.35～0.8	ボート八角
76	平ノミ	1	9.3	0.09	
77	平ノミ	1	11.5	0.15	
78	平ノミ	1	19.5	0.5	
79	イチョウノミ	1	49.5	1.4	
80	イチョウノミ	1	19.3	0.4	
81	エンショウノミ	11	30.8～82.5		鉄筋の転用5点
82	セリヤ矢	7	25.8/22.0	1.05/0.95	
83	セリ板	7	11.5～27	0.25前後	孔なし
84	セリ板	13	15～27		基部に孔
85	セリ板	7	16.5～20		折れ部に小孔
86	セリ板	3			基部と上部に孔
87	セリ板	1			破損、不明
	小計	326			

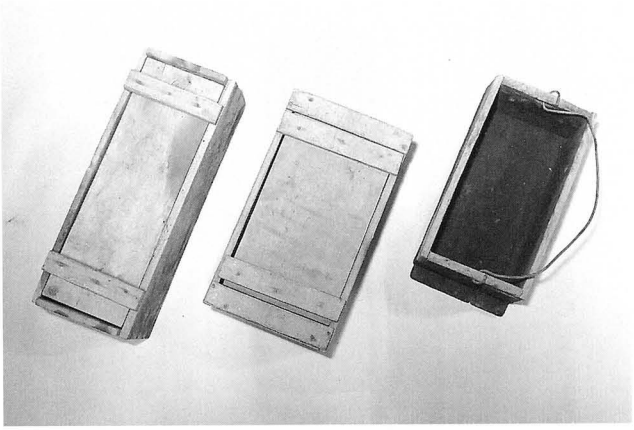
(鍛冶具)

	器種	点数	計測値(cm)	重量(kg)	備　考
88	ヤキヒバシ	1	54	1	
89	ヤキヒバシ	1	41	0.75	
90	ヤキヒバシ	1	45.5	0.92	ノミ用
91	ヤキヒバシ	2	33.5	0.55/0.47	ノミ用
92	ヤキヒバシ	1	35.7	0.5	ノミ用
93	ヤキヒバシ	2	34.5/35	0.47/0.3	
94	ヤキヒバシ	1	34	0.38	
95	ヤキヒバシ	1	30.5	0.3	
96	金槌	1	22	1.52	
97	ポンチ	1	16	0.19	
98	ポンチ	1	9	0.08	
99	鞴	1			
	小計	14			
	合計	340			

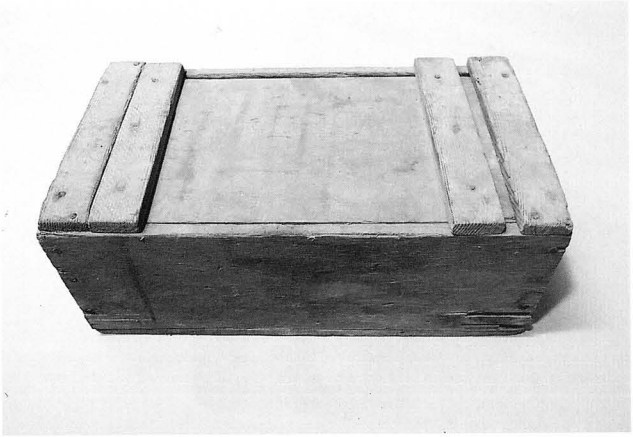

ハリマワシ　石工具


エンショウノミ　石工具

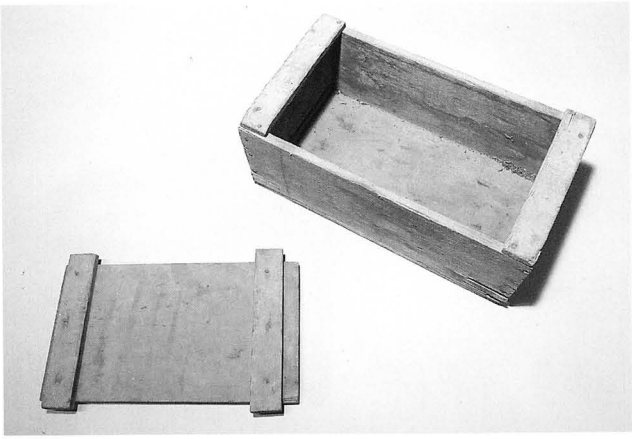
セットウ　石工具


道具箱　石工具

オシキリ　石工具


道具箱　石工具

マルノミ　石工具


道具箱　石工具

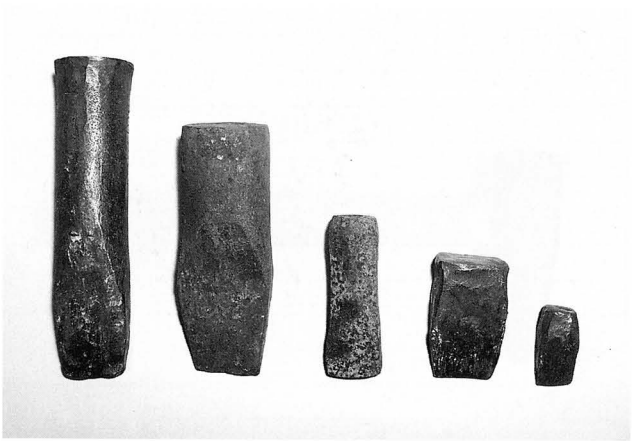
ヤ（大型）正面　石工具

ヤ（大型）側面　石工具

ハラシヤ　正面　石工具

ハラシヤ　側面　石工具

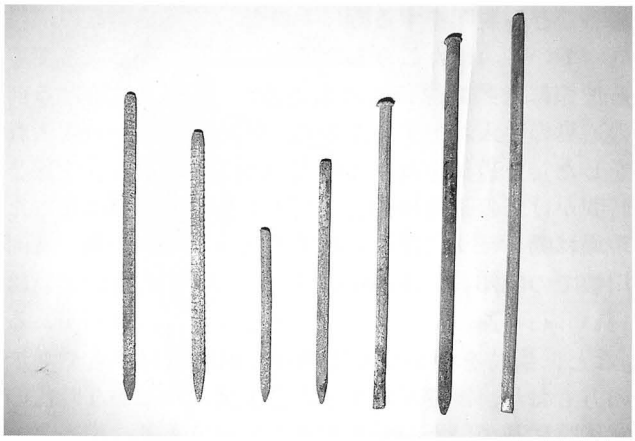
セリヤ　セット関係　石工具



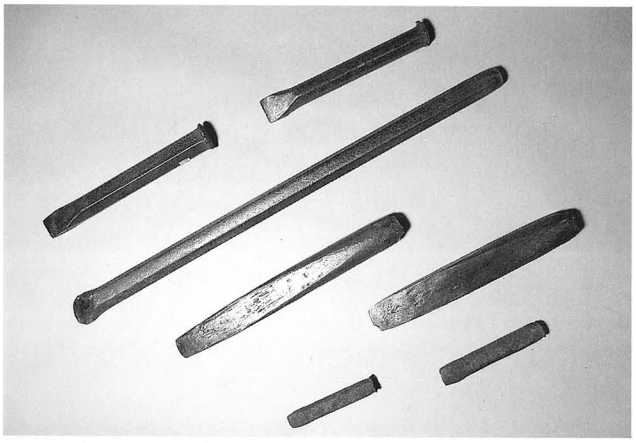
ヤ　各種　正面　石工具

セリヤ　組み合わせ状況　石工具

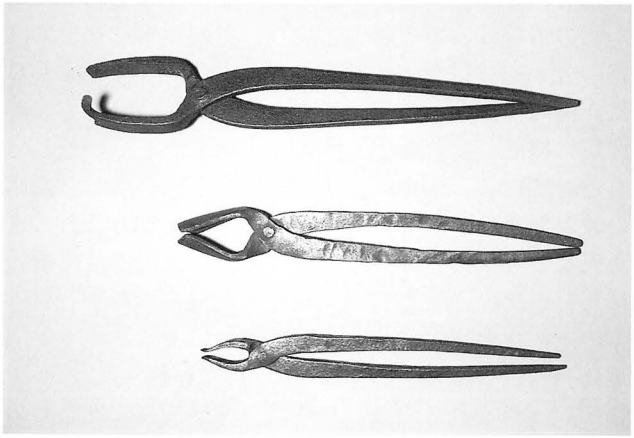
ヤ　各種　側面　石工具



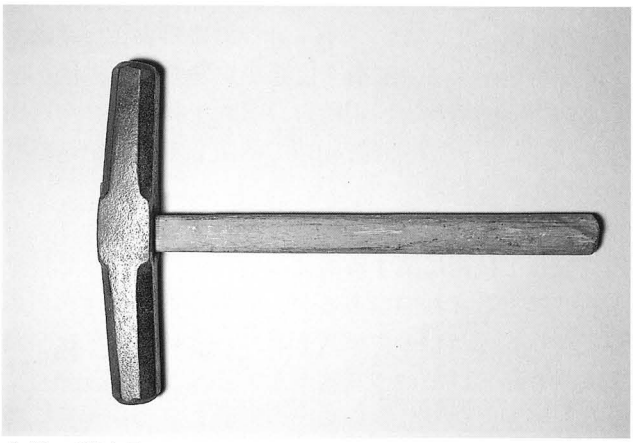
エンショウノミ各種　石工具



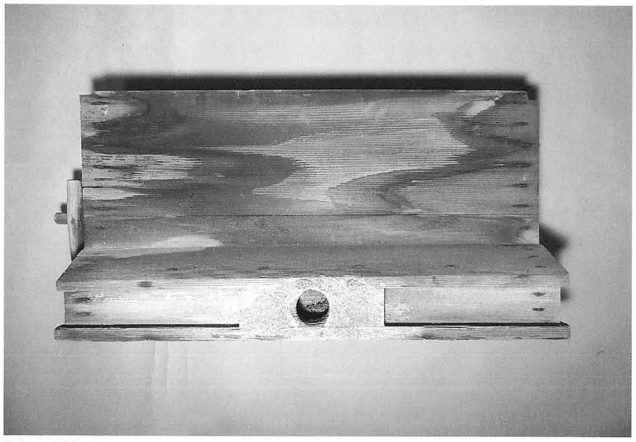
ヒラノミ・イチョウノミ　石工具



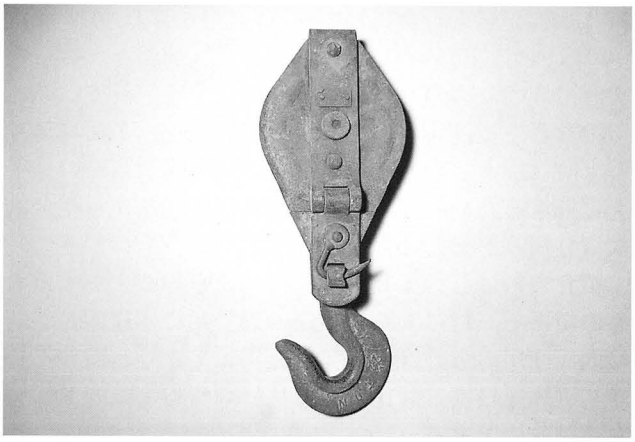
ヤキヒバシ各種　鍛冶具



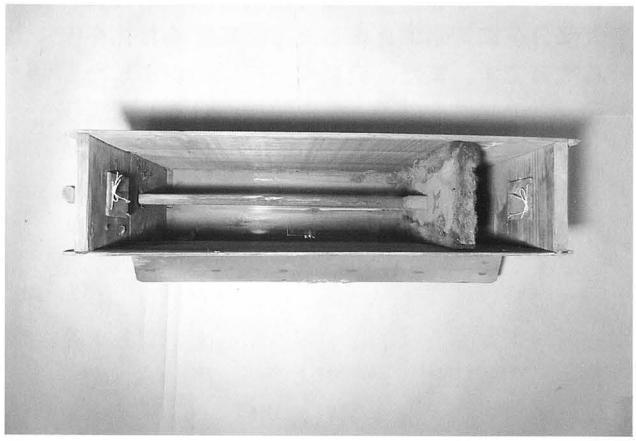
金槌　鍛冶具



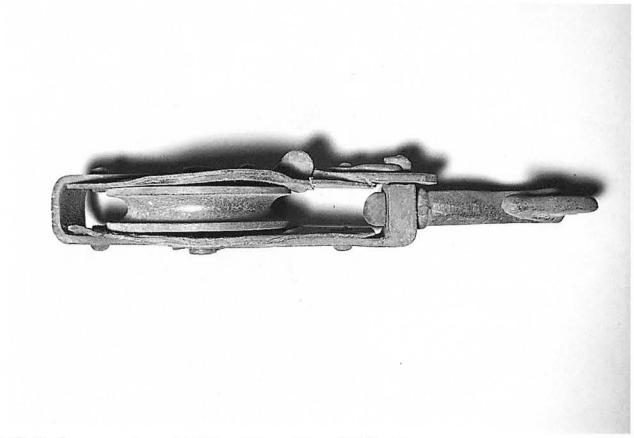
鞴　正面



動滑車フック　正面　石工具・運搬具



鞴　内面



動滑車フック　側面　石工具・運搬具

4　課題と活用

甲州石工としては、江戸時代から在方御用石工の宇津谷村（旧双葉町）の石切人や夜子沢村（身延町）の石切人は比較的有名な職人集団で、『石切人数書上帳』や『村明細帳』、『石大工由来記』などから散見することができ、中世まで遡る歴史が記されている。また甲府の町方石工の存在も、『坂田日記抄』や『町方職人書上』などから知ることが出来る。また、甲府城内外の石切場等の存在は調査の成果として把握されていると共に、身延町切石・甲府市北部の石切跡など産業関連遺構も把握されているが、それらに関わる資料の存在はあまり知られていないのが現状であり、職人の氏名などは石造物などに記載されたもの以外はほとんど判っていない。中・近世の資料調査は非常に困難な状況がある。これら文献史料から石工には石積み・仏塔（石造物）・川除といった工程に応じた専門職が存在し、普請や寺社周辺で活躍していた記録や痕跡が残されている。

それでも近代以降のものでは、近代化遺産としての調査や石工技術に関する再認識の高まりによって、全国的には着目されつつあるが、活躍していた職人が高齢となり故人となるケースもあり、道具類の散逸や聞き取りも難しいといった状況もある。「時既に遅く」といった事態となりつつあるが、意識しながら調査に努めればまだ資料等が発見される可能性があると思われ、石垣普請や石造物の作成技術や歴史の一端が明らかになっていくかもしれない。また、関わった職人の実態把握のための文献調査と、現存する道具や伝承・墓地などを把握するための民俗学的調査、石切場跡や丁場跡、道などの考古学的調査、具体的な当時の様子を把握するための聞き取り調査を併用しながら総合的な取り組みが必要と考えている。

紹介資料は石大工職人の道具組成を知る上で貴重なものである。特に大澤氏使用の道具類では運搬具が、横内氏使用のものは石工具が充実しており、現在伝わる石工関連技術と対比できる良好な資料で、とても興味深いものである。

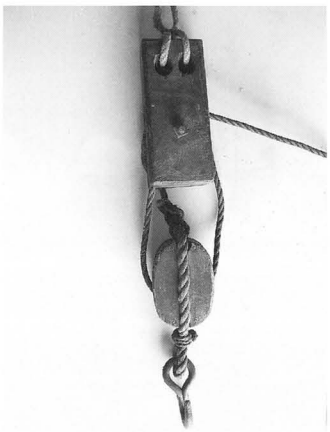
当センターではこれらの道具を実際に活用しながら、伝統的な石工技術の検証作業を、現代工法を応用する形で、甲府城の整備事業や見学会などで活かしていくと共に、技術を復元したり、体験できるイベントにも努め、動力機等がなかった時代の先人たちの苦労や工夫などを懐古、学習しながら楽しむ機会を提供してきた経過がある（文末写真図版）。普段見たこともない道具を実際に手に持ったり、使ってみると道具一つ一つの重量や道具の扱い方など、参加者にとってもすごく新鮮で、こうした伝統技術に興味を持ってくれる子供たちもいる。矢締め（大玄翁）などは約10kgと重たいものであるが、江戸時代の職人はこの４倍の重量の道具を使って石の切り出しをしていた記録があるなどの説明をする際に手にとって実感するのに役立っている。またこうしたイベントを通して入ってくる情報にも興味深いものもある。「早朝、出掛ける前の道具の手入れをするために、朝暗いうちから火入れをした」、「道具をみれば職人の腕前がわかる」「片道２時間かけての丁場移動」、「バイクを買って楽になった現場移動」、「父に連れられて手伝った石割作業」、「河川敷での間知石の荒割作業」「・・・鉄工所製の道具はいい」「石を運んでいる写真がある」「丁場の写真がある」など、当時を懐かしんで語って頂ける見学者や参加の方もおり、需要が高かった石工業の華やかな時代の実体験に基づいた一面を知ることができる。担当者としても、こうした実際にやってみることと実務経験者からの情報はとても勉強になり、景観整備や歴史的課題の究明に貴重なデータとなっている。実験作業からは、実際に体験することによって、どういった方法が適切に機能していたかを実証するヒントを見いだしてもらっている。例えば、木製の滑車を使いながら滑車の数が異なるものを使ってその安易さを知ること、また三又と神楽桟（かぐらさん）二台を併用させて前後に石材を移動させる方法、機能的かつ合理的な石材移動の方法など実際に行ってみることにより、築城絵図等に見られる描写が適切なものかを判断することができる。またこれらのことから、考古学的に見た石材の観察ポイントが見えてくる場合もある。例えば、築石の割面の調整（割りっぱなしではなく、矢穴が美しく見えるようにハツる）や、石材の擦痕の発生過程の検証、道具の検証などのヒントが得られている。展示では出土品との比較を現資料との対比、整備事業での道具紹介、伝統技術の紹介などとして一部を常設展示し活用している。現段階ではまだまだ活かしきれずに課題は多くあるが、実践から得られる情報の多さと楽しさは、何物にも代え難いものがある。まとまりのない文章となったが、活用事例の一部を紹介した。

最後に、末筆ではございますが瀬戸やす代、横内恭二の両氏には貴重な遺品を調査する機会を与えていただきましたことと、その後考古博物館へ研究資料として大部分を御寄贈頂きましたことに厚くお礼を申し上げる次第です。また、資料をご提供頂きました五味博氏、当センターのイベント等にご協力、ご理解、お付き合い頂きました中北建設事務所、株式会社望月組土木、藤造園建設株式会社、関係各位にはこの場を借りて感謝申し上げます。

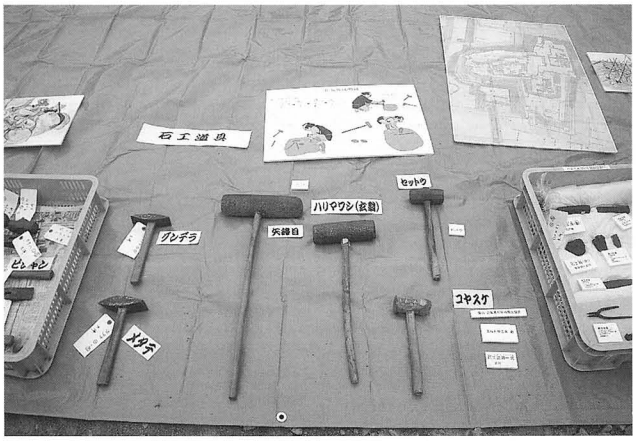
参考文献

牟礼町教育委員会『牟礼・庵治の石工用具－重要民俗文化財－』（1998）
山梨県教育委員会『山梨県の諸職』 山梨県諸職関係民俗文化財調査報告書 (1988)

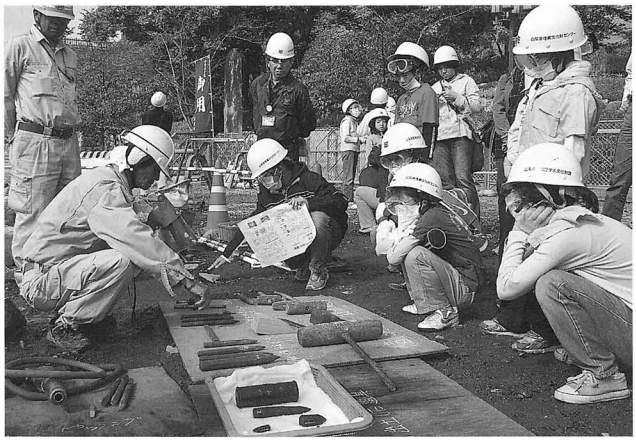
（活用事例）



木製滑車組み合わせ事例（五味氏提供）



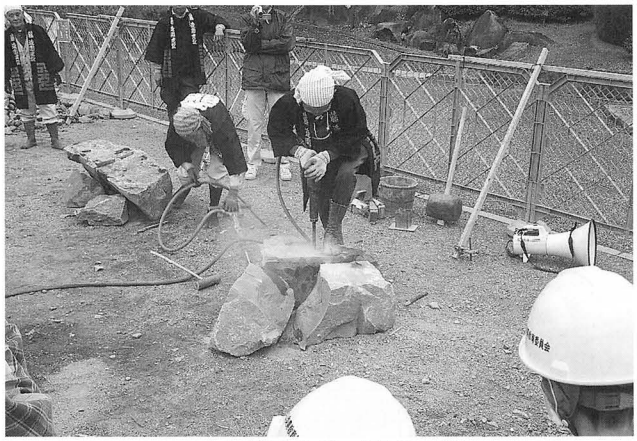
イベントでの活用状況（寄贈資料）



甲府城の石垣補修工事で使用されている道具

セリ矢とセットウ（現在の割石具）

二又と木製滑車による石積み作業実験



ルートハンマーによる削孔作業（現代工法）

人力巻き上げ機（かぐらさん）による巻き揚げ作業実験

木製の矢（４寸幅）による割石実験

鉄製の矢（４寸幅）による割石実験

ソリによる石曳き実験

セットウとコヤスケによる面取り体験

セットウとセリ矢による割石体験

ソリを利用した運搬実演

三又と木製滑車による荷の引き揚げ実験

石曳き実験

割石体験（現代工法を使うと子供たちだけでも簡単に割ることができます。）

研　究　紀　要　29

発　行　日　2013年3月25日
編集・発行　山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923
ＴＥＬ　055-266-3881・055-266-3016
E-mail：kouko-hak@pref.yamanashi.lg.jp
E-mail：maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

印　　刷　港北出版印刷株式会社
TEL 055－244－0466

BULLETIN
OF
YAMANASHI PREFECTURAL
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY
&
ARCHAEOLOGICAL CENTER
OF
YAMANASHI PREFECTURE

NUMBER 29

CONTENTS

MARCH 2013

About the unpublished artifacts of the Sakenomiba Site — MITAMURA Haruhiko, HOSAKA Yasuo — 1

The Political Power of Yamato Viewed Through the Kofu Basin (2)
— Jar-shaped Haniwa from Kai Choshizuka Tumulus — — KOBAYASHI Kenji — 11

About a mason tool of Kousyuu(Yamanashi) — NOSHIRO Yukikazu, OSADA Takashi — 23